



2016 年度

アンコール遺跡整備公団

# インターンシップ報告書

金沢大学/小松短期大学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2017 年 1 月







写真1. 業務の初日にアンコール遺跡整備公団水管理部門にて（左から、若林唯、今井菜緒、近藤友理奈、田中嶺那、濱崎佳奈、須田瑞帆、三輪聡子、大関美結、伊藤果穂、森瀬陽人）。

写真2. 業務初日の始業式と担当職員との顔合わせ。各グループの担当業務がここで決まる。

写真3. 各グループの担当職員から業務内容などについての説明を受ける（グループ1）。

写真4. 業務終了後には担当職員の指導を受けながら報告書を英語でまとめる（グループ1、2）。





写真1. 現場へは職員が運転するバイクで移動する(グループ2).

写真2. 北スラ・スラン村の視察(グループ4).

写真3. 西バライ西側堤防の視察(グループ2).

写真4. 西バライ展望台での説明(グループ2, 4).

写真5. 古代集落ロヴィアの視察(全グループ).

写真6. アンコール・ワット寺院にて(全グループ).

写真7. アンコール・ワット寺院で担当職員に説明を受ける(全グループ).



写真1. エコビレッジ開発総責任者 May Marrady 氏の解説を受ける。

写真2. 民家の中で担当職員の説明を受ける（グループ3）。

写真3, 4. エコビレッジの子どもたちとの記念植樹。

写真5. 植樹を終えての子どもたちとの記念写真。

写真6. エコビレッジの養魚場の見学。魚へのえさやりを体験する。

写真7. エコビレッジでのランチ。エコビレッジで収穫された農作物などを賞味する。



写真1. トンレサップ湖畔のハス畑にて.

写真2. トンレサップ湖の遊覧. 東南アジア最大の湖でのクルージングを楽しむ.

写真3. ゾウに乗っての遺跡めぐり. バイヨン寺院のまわりをゆったりと一周.

写真4. アンコール・トムの北大門にて記念写真.

写真5. オールド・マーケットの売り子さんと.



写真1. 鹿児島大学グループの野外調査実習（スラ・スラン沐浴場遺構での魚類の採集）。

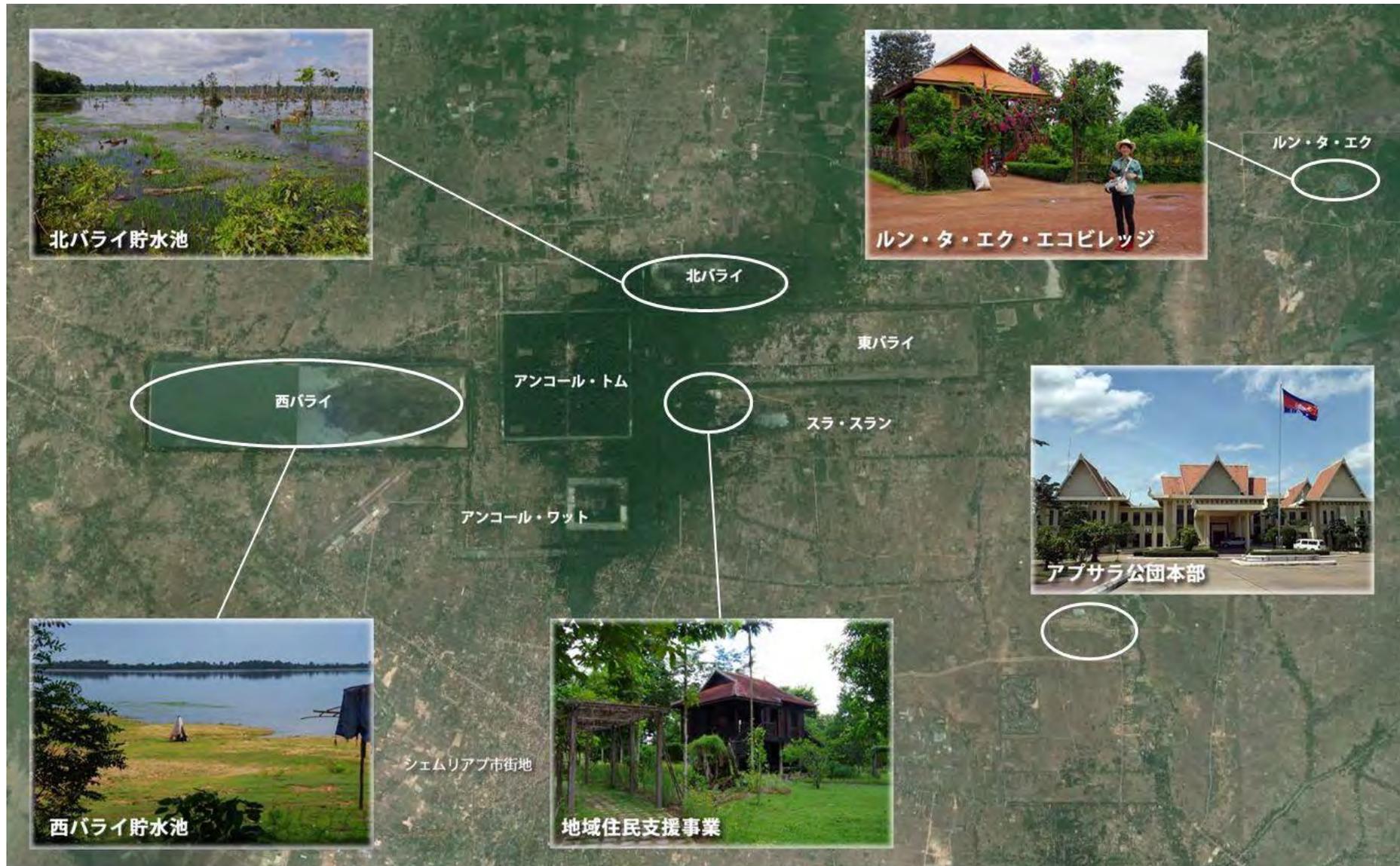
写真2. 鹿児島大学グループの野外調査実習（西バライ貯水池での魚類の採集）。

写真3. 鹿児島大学グループの野外調査実習（網にかかった魚の採集）。

写真4. 鹿児島大学グループの野外調査実習（本村さんによる採集した魚の解説）。

写真5. 埼玉大学グループの野外調査実習（プラ・カーン遺跡での絞め殺しの木の見学）。

写真6. 埼玉大学グループの野外調査実習（クロール・ロメアス遺跡での巨樹の観察）。



インターンシップでの業務地（グループ1：地域住民支援，グループ2：ルン・タ・エク，グループ3：西バライ，グループ4：北バライ）

## 2016 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

### 目 次

1. はじめに	加藤和夫	・・・	1
2. 2016 年度インターンシップの概要と成果, 今後の課題	塚脇真二・Hang P. …		2
3. 小松短期大学からのインターンシップ学生の派遣	木村 誠	・・・	6
4. インターンシップ参加学生の報告			
1) カンボジアでの貴重な経験	大関美結	・・・	9
2) カンボジアで過ごした特別な 2 週間	今井菜緒	・・・	14
3) JAPANESE APSARA !	濱崎佳奈	・・・	18
4) インターンシップを終えて	須田瑞帆	・・・	21
5) カンボジア派遣での成長	伊藤果穂	・・・	25
6) ANOTHER SKY	若林 唯	・・・	31
7) インターンシップに参加して	田中嶺那	・・・	36
8) 成長を遂げたカンボジアでの 2 週間	三輪聡子	・・・	39
9) アンコールインターンシップに参加して	近藤友理奈	・・・	43
10) アプサラ公団でのインターンシップを終えて	森瀬陽人	・・・	46
5. チューターの報告			
1) 3 度目のカンボジア	河本麻実	・・・	49
2) 2 度目のシェムリアップとアンコール世界遺産	若宮野乃花	・・・	52
6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告			
1) 埼玉大学の海外フィールド実習	荒木祐二	・・・	55
2) 海外フィールド実習を終えて	岩崎 翼	・・・	57
7. 鹿児島大学の海外フィールド実習報告			
1) 鹿児島大学の海外フィールド調査実習	本村浩之	・・・	59
2) カンボジア, シェムリアップでの淡水魚類相調査	福井美乃	・・・	61
3) カンボジアにおける淡水魚類相調査と得られたもの	立川日奈子	・・・	63
8. 特別寄稿: 小松短期大学とアプサラ公団との繋がり	長野 勇	・・・	66
9. 資 料: 2016 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	69

図版1：インターンシップの参加学生たち

図版2：インターンシップでの現場業務（1：西バライ，北バライ，地域住民支援）

図版3：インターンシップでの現場業務（2：ルン・タ・エク・エコビレッジ再開発）

図版4：インターンシップの休日

図版5：埼玉大学と鹿児島大学の海外フィールド実習

図版6：アンコール遺跡世界遺産公園での各グループの業務地

## 1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 加藤和夫

平成 22 年度から毎年実施されている「アンコール遺跡整備公団インターンシップ」が、今年度は 8 月 21 日から 9 月 3 日までの 14 日間のスケジュールで実施されました。今回で 7 回目となるこの海外インターンシッププログラムには、金沢大学からは昨年度と同じく 8 名の学生+チューター2 名が参加しました。チューターも含めた 10 名の内訳は、人間社会学域の国際学類 7 名、人文学類 2 名、自然科学研究科 1 名で、全員が女子学生でした。チューターを除く 8 名の参加者のうち 2 年生が 6 名（3 年生が 2 名）と多かったことも今回の特徴でした。また、昨年に続いて小松短期大学の 1 年生 2 名が参加し、9 月 2 日に現地で行われたアンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）と小松短期大学の交流協定調印式に本学の学生も出席させていただくという貴重な機会を得ることもできました。

4 年前から環日本海域環境研究センターと国際学類との共催として新たなスタートを切った当プログラムは、これまで同様、環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授の献身的なご尽力によって、事故もなく順調に実施することができました。塚脇教授には、今回も PR 活動や公団との折衝を含む諸準備、国際学類長および国際学類キャリア形成支援委員長等を含む実施委員会での参加学生の選考、事前の情報交換会の開催、緊急連絡網の作成や学内のさまざまな組織との交渉、カンボジア国内諸機関との連絡など、諸事万般にわたってお世話になり、インターンシップ中も現地で学生のサポートに細心の注意を払っていただくとともに、毎日多くの写真とともに詳細なレポートをメールで頂戴しました。共催学類の長として深く感謝申し上げる次第です。また、昨年と同プログラム経験者でチューターとして同行してくれた大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻 1 年の河本麻実さん、国際学類 3 年生の若宮野乃花さんにも感謝します。お二人の経験と配慮が参加学生にとって大きな支えとなったに違いありません。そして、今回も快く本学学生を受け入れてくださり、ご指導いただいたアプサラ公団職員の皆様にも心より感謝申し上げます。

なお、当プログラムは一昨年、昨年に続いて、今年度も在カンボジア日本国大使館による日カンボジア絆増進事業に認定されました。アンコール世界遺産では唯一とも言える学生のインターンシップとして、回を重ねて当プログラムが高く評価されていることの証しと言えましょう。

10 月 14 日に開催された報告会での参加学生たちのレポートを聞きながら、このプログラムが、人の暮らす数少ない世界遺産での海外インターンシップとして極めて貴重な体験の場となっていることが確信できました。平成 26 年度から文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」に採択され、本学にはより一層のグローバル化が期待されています。当プログラムは昨年度から金沢大学教育改革 GP として採択され、5 年間は大学の補助金を得て実施できることとなりました。当プログラムが、今後ますます本学のグローバル化推進の一翼を担うものとして成長し続けることを願って、ご挨拶といたします。

## 2. 2016年度インターンシップの概要と成果、今後の課題

金沢大学環日本海域環境研究センター・教授 塚脇真二  
アンコール遺跡整備公団・副総裁/水管理部門長 Hang Peou

カンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での海外学生インターンシップも今年度で7回目になる。昨年度につづいて金沢大学の8名に加えて小松短期大学から2名の学生を迎えての実施となった。このインターンシップの期間に合わせての埼玉大学と鹿児島大学の海外フィールド実習があったため、これにチューターの2名を加えての学生総数が15名、これに同行する引率する教職員5名という大所帯になった。このような大人数にもかかわらず、また、世界遺産の管理業務が例年になく多忙であったにもかかわらず、アプサラ公団職員たちの手厚い指導と保護のもと、学生たちの積極的ながらも節度ある行動もあってすべての予定を無事に終えることができた。同公団のSum Map 総裁、ならびに同公団関係諸氏に心からの謝意を表したい。また、金沢大学国際学類加藤和夫学類長をはじめとするインターンシップ実施委員会の関係諸氏、同環日本海域環境研究センター長尾誠也センター長、小松短期大学長野勇学長、同庶務課西田友紀主事ほか関係諸氏にはさまざまな支援をたまわった。金沢大学からは平成28年度教育改革GP事業としての経済的支援をいただいた。在カンボジア日本国大使館にはこのプログラムを平成28年度日カ絆増進事業に今回も認定いただいた。これらの関係諸氏に深い感謝の意を表したい。

金沢大学からの参加学生は、人間社会学域国際学類2年生5名、同3年生1名、同学域人文学類2年生1名、そして同3年生1名の計8名であり、すべて女子であった。参加学生の学類構成には例年ほどの多様性はなかったが、これは応募の段階からいえることであった。一方の小松短期大学からは地域創造学科臨床工学ステージの1年生女子1名、男子1名の2名が参加している（写真1）。女子9名、男子1



写真1. 業務初日の担当職員との顔合わせ

名の学生たちは、2~3名ずつの4グループに分かれ2週間をとおして公団の業務に従事した。今年度の参加学生たちも、現地での協調性や積極性、社交性などのすべてにわたって申し分のない学生たちだった。なお、金沢大学からの参加学生の8名は日本学生支援機構の平成28年度海外留学支援制度の助成金7万円を、小松短期大学の学生は同短大の海外派遣支援奨学金7万5千円をそれぞれ受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。このインターンシップの企画・調整から参加学生の募集や選別、実施、そして実施後にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。

昨年度のインターンシップにチューターとして参加した金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻 1 年の河本麻実と、昨年度はインターンシップ学生として参加した国際学類 3 年の若宮野乃花がチューターとして参加学生たちに同行した（写真 2）。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手、学生たちと公団職員との間に入っでの連絡や時間調整、学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるチューター業務であったが彼女らはこれらを的確にこなしてくれた。小松短期大学からは引率教員として木村誠准教授が同短期大学の学生たちに同行している。また、海外フィールド実習を行った 2 大学では、埼玉大学教育学部の荒木祐二准教授が学生 1 名と技術職員各 1 名を、鹿児島大学総合科学博物館の本村浩之教授が大学院生と学部学生各 1 名を引率してそれぞれ現地を訪れている。



写真 2. チューターの河本麻実と若宮野乃花

例年のインターンシップでは、学生たちは 3~4 のグループに分かれ、それぞれが従事する業務の担当職員らとほぼすべての行動をともにしていたが、今年度については、既述のとおり公団の業務が例年になく多忙であったため、学生たちを担当できる職員の不足から例年の方式をとることができなかった。そのため、今年度の学生たちは、4 つのグループに分かれながらも、第一週目は公団が用意した 4 つの業務にそれぞれ順番に従事し、第二週目は、4 つのグループが合同で日替わりながらも同じ業務に従事した。この方式をとらざるを得なかったため、学生たちは例年のようにひとつの業務についての深い理解を得ることはできなかったが、参加の全学生がすべての業務をひととおり経験することができた。

今年度のインターンシップで注目されることは、昨年度に引き続き、インターンシップ学生としての 2 大学の学生 10 名とチューター 2 名、海外フィールド実習としての 2 大学の学生・院生計 3 名という、総勢 15 名もの学生たちがアンコール世界遺産で活動したことである。金沢大学のみをとってみれば学類構成に多様性を欠いていたが、参加の 4 大学をまたいでとなると、学生たちが所属する学類や学部はさまざまであり、また、学年も 1 年生から大学院生までと多岐にわたっていた。そのため、大学間の交流はもちろんのこと、専門分野や学年の垣根を超えての学生たちの交流にはよい相乗効果や波及効果を見ることができた。学生たち個々の専門分野を背景とする多様な興味が他の学生の関心を呼び、それが連鎖的に広がっていくという例年どおりの傾向を随所で見ることができた。

さらに、海外インターンシップと海外フィールド実習とでは活動内容が異なるとはいえ、4 つの大学での合同企画としてのこのプログラムの実施は、それぞれの活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることになった。埼玉大学の荒木准教授や鹿児島大学の本村教授はカンボジア情勢に習熟した若手研究者であり、小松短

期大学の木村准教授は昨年の本プログラムで十分な経験を積んでいる。3名の若手研究者の参加によって、このプログラムを継続させる展望がさらに開けてきたように感じる。

インターンシップ業務中、学生たちの手による記念植樹がルンタエク・エコビレッジで実施された。業務をしばし離れて担当職員らとアンコール・ワット寺院の見学にも行った（写真 3）。最終日にはアプサラ公団と小松短期大学との大学間交流協定の調印式に出席する機会を学生たちは得た（写真 4）。カンボジアと日本の国歌が流れる中での国際交流の現場に学生たちは立ち会うことができた。さらに、シェム



写真 3. アンコール・ワット寺院の見学

リアプ市内のレストランで、小松短期大学の長野学長の招待によるお別れ夕食会を開催していただいた。いずれも参加学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う。

このインターンシップの成果は例年と同様、以下の3点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

（1）学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力とその裏側で費



写真 4. Map 総裁、長野学長と調印式後に

やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおしく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることができたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにもした。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

(2) 学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした(現地への成果の還元)。参加学生たちはそれぞれの業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点は否定できないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1) 学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である。

(3) 学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった(宣伝効果)。安全管理の観点から、インターンシップ参加学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに金沢大学あるいは小松短期大学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。したがって、このインターンシップは世界遺産における両大学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績は7回にわたる実施によって十分に確立できている。このプログラムを継続させるための経済的基盤も金沢大学教育改革 GP 経費の受給によって安定したかにみえる。長期的にこれを継続するための懸案のひとつであった他大学との連携についても、小松短期大学と埼玉大学の継続的な参加、ならびに鹿児島大学の新たな参加によってさらに大きく前進した。とくに、小松短期大学とアプサラ公団との大学間協力協定の締結は、このプログラムの今後の継続にはきわめて大きな意味をもつ。

このように、例年どおりの成果をあげて終了し、さらには今後の継続にも明るい見とおしを得ることができた今年度のプログラムであったが、その一方で今後の検討と対応が必要なことも見つかった。昨年度までの参加学生たちは、国際学類を中心としつつもその他の学類からの参加も多数であり、また「インターンシップ」の科目の正規履修対象となる3年生が多数だった。しかし、今年度の参加者は国際学類と人文学類とにかぎられ、しかも2年生が8名中6名と多数であった。このプログラムの昨年度からの実施目標のひとつとして、金沢大学の3学域16学類の学生たちの多様な専門性と興味とにこたえるべく、アプサラ公団内のみならず、シェムリアップ州の教育機関など公団外での派遣先の多様化を推進してきたが、応募してくる学生たちの学類構成が多様性を失ってしまったのは、この実施目標の根底がゆらぐことになる。この理由として、昨今の学生たちに海外への興味がうすれつつあることや、海外派遣プログラムが金沢大学で多数実施されるようになったことなどがあげられよう。このインターンシッププログラムへの参加学生の多様性回復のための対策を早急に検討すべきと考える。

### 3. 小松短期大学からのインターンシップ学生の派遣

小松短期大学地域創造学科・准教授 木村 誠

金沢大学において 2010 年度に始まったアプサラ公団での学生インターンシップに、昨年度に引き続き小松短期大学から 2 名の学生を受け入れて頂いた。まずは平素より本学の国際交流事業に対してご支援、お力添えを頂き、本事業においてはアプサラ公団をはじめとする関係各所との調整にご尽力を頂いた金沢大学教授/小松短期大学特任教授塚脇真二氏、そして本学学生の参加に対してご理解と温かいご支援を頂いた金沢大学国際学類加藤和夫学類長、今年度もインターンシップの受け入れをご快諾頂いたアプサラ公団副総裁 Hang Peou 氏、ほか関係の皆様にご心からの謝意を申し上げたい。

平成 25 年度から小松短期大学で進められてきた長野勇学長による大学改革の取り組みにおいては、大学の国際化が重点的に推進されてきた。本事業は、本学の学生にとって海外でインターンシップに参加することが出来る唯一のプログラムであり、学内においてとりわけ教育効果の高さが注目されている。本学からは、今回臨床工学ステージに在籍する 1 年次生 2 名が参加した。参加学生のうち、森瀬陽人は昨年度の参加学生と従弟の関係にあり、本学入学直後からアプサラ公団のインターンシップに興味を持っていたとのことであった。教員からの呼びかけによってではなく、学生間の交流の中で国際交流事業への参加動機づけが高まったということを知り、大変嬉しく感じたことを記憶している。

当初、本学からの参加学生は金沢大学からの参加学生と良好な人間関係を構築し、2 週間を楽しく過ごせるかという点について不安を抱いていた様子であった。この点については、説明会や懇親会におけるチューター学生の積極的な声掛けによって随分と学生の緊張、不安が和らいだようであった。安心したのであろうか、説明会に向かう時より、帰路の車内の方が、学生たちが楽しそうな表情であったことを記憶している。チューターの河本さん、若宮さんの気遣いには、現地での業務においても助けられることが多かった。2 人の献身的なサポートに心から感謝を申し上げたい。自分の役割を十分認識し、一歩先を読んで行動する 2 人の姿には感心するばかりでなく、学ぶことも多かった。本学の学生にとっても 2 人は良いモデルとなってくれたように思う。

本学では、渡航前の事前研修を合計 8 回実施した(写真 1)。昨年度は日常英会話と危機管理、各種手続きに関する研修が主であったが、今年度は昨年度参加した学生の感想を取り入れて、カンボジアの歴史、宗教についての勉強会を新規に追加した。また、養護教諭からの提案により感染症についての説明会も実施された。日常英会話の



写真 1. 事前研修の様子

勉強会には本学において英語教育を専門とする島内俊彦准教授にもお力添えを頂いた。このように、学内の教職員が本事業への協力を申し出てくださったことは大変に心強いことであった。今後さらに多くの教職員が小松短期大学の国際交流事業に関心を寄せて頂き、教職員全体で国際交流事業を見守る雰囲気が広がる事を期待したい。

今年度は鹿児島大学と埼玉大学と活動を共にさせて頂く機会に恵まれた。インターンシップ期間中、鹿児島大学の実習に同行させて頂き、学生は魚類の採取、魚を種ごとに分類する作業を体験することができた(写真2)。自分自身の専攻とは全く異なる分野について熱心に学んでいる学生と交流し、研究の方法について学ぶ機会を得た事は、参加学生の学問に対する視野を広げ、自分自身の専攻について改めて考えるきっかけとなったのではないかと考えている。



写真2. 鹿児島大学との魚類調査体験

鹿児島大学教授本村浩之氏、埼玉大学准教授荒木祐二氏にはそれぞれの専門領域の立場から本学の学生に貴重な助言と新鮮な経験の機会をご提供頂いたことに心から感謝を申し上げたい。

今回、本学からの参加学生は2名とも臨床工学技士を目指す医療系の学生であった。医療系の大学生については、他の専攻の学生と比べて進路選択の自由度が低いことが指摘されることが多い。多くの場合、入学前の段階から目標となる資格が決まっており、その取得を目指して日々の勉強に励むことが要求される。本学の学生においても臨床工学技士の国家資格の取得と医療機関への就職という目標を目指すことを前提として大学での教育が進められる。だからこそ、目標資格についての理解や動機づけが不十分であった学生の入学後のミスマッチの問題が大きく取り上げられることになる。本学においても医療系学科の入学後のミスマッチは無視できない問題である。私は、本インターンシップは学生にとって自分自身の目標や自分の置かれている環境について、これまでとは違う視点で見つめ直す絶好の機会であると期待し、医療系の学生が参加を表明してくれたことを嬉しく感じていた。

学生達がアプサラ公団でのインターンシップに取り組む姿はもちろんのこと、ロン・タ・エク・エコビレッジの小学校で子どもたちが勉強する様子を見学する姿、記念植樹をする姿(写真3)、そしていわゆる孤児院で子ども達と遊んでいる様子から、私はこの2週間の経験が本学の学生にとって、新しい視点で自分自身を、自分の夢を、あるいは日本を考える機会となってい



写真3. エコビレッジでの記念植樹

ると確信した。そればかりでなく、今後の大学での学習、社会での活動の基礎となる知的好奇心についても大いに刺激されたのではないかと考えている。2週間のインターンシップの終了後、専門科目の成績が上がっているということは無いだろう。しかしながら、今後の大学生活、キャリア形成の根となる部分については大いに成長したのではないかと考える。本インターンシップの参加者には、新たに増えた根で、あるいはアンテナで、これまで以上に多くのことに興味を持ち、主体的に新しいことにチャレンジして欲しいと願っている。

インターンシップ最終日にはアプサラ公団と小松短期大学とにおける「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書への調印式が行われた(写真4)。この調印式の実現のためにご尽力頂いた塚脇氏にはこの場をお借りして深謝申し上げたい。また、調印式では両国の国歌を流して頂くなど、大変丁寧な対応をして頂いた。アプサラ公団の皆様には深い敬意を表したい。



写真4. 調印式の様子

調印式の前にはインターンシップ学生の最終面接が実施され、本学の長野勇学長と本事業の事務担当の庶務課西田友紀さんに学生の取り組みの様子をご覧頂くことができた。大学のマネジメントのトップである学長および実務担当者に現地の様子をご覧頂き、教育効果を理解して頂くことができたことは、大変意義深いものであった。

お陰様で今回のインターンシップもトラブルなく無事に終了することができた。これは、学生が不安なく2週間を過ごせるよう、常に学生の様子を観察し、丁寧な対応を実践された塚脇氏の存在があってこそ実現できたことである。その学生への姿勢から、国際事業担当者に求められる資質について私自身学ぶことが多かった。塚脇氏の学生へのきめ細かい配慮に対し、改めて感謝の意を表したい。小松短期大学国際交流センターとしても国際事業担当者の人材育成という観点からの取り組みについて検討を始めたいと考えている。

最後に、本事業への本学学生の参加のためにご尽力を頂いた関係諸氏に改めて深謝申し上げるとともに、本事業の更なる発展を心から祈念申し上げたい。

#### 4. インターンシップ参加学生の報告



## 1) カンボジアでの貴重な経験

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年 大関美結 (グループ 1)

今回、8月21日から9月3日までの2週間、カンボジア国立アンコール遺跡整備公団(アプサラ公団)での海外インターンシップに参加した。このインターンシップに参加した動機として大きく3つある。1つ目は、この遺跡は遺跡内で人々が生活しているというめずらしい世界文化遺産のひとつであり、私はこの人々の暮らしと世界遺産、そして観光がどのように結びついているのかを実際に目で見てきたいと思ったからだ。2つ目は、国際協力に興味があり、先進国である日本では経験することのできない様々なことを途上国に行って経験し、国際的な視野を広げたいと思ったからである。そして3つ目は、今までにこのインターンに参加された先輩方から食べ物ととにかくおいしいということを知り、いろいろなものを食べてみたいと思ったからである。

アンコール遺跡群は約9世紀から15世紀にかけてクメール王国のアンコール王朝の王たちが築いた宗教都市である。この遺跡群にはアンコールワットやアンコールトムだけでなく、大小さまざまな遺跡があるが、長い年月をかけ崩壊した遺跡を日本やフランスなど様々な国の協力によって保存・修復されてきた(写真1, 写真2)。私たちは、2週間という短い期間ではあったが、平日の午前中はアプサラ公団の職員の方のバイクに乗せてもらい業務地へ行き、説明を受けたり視察をしたりし、午後はオフィスに戻り英語でディスカッションを行った。休日の午前中はみなでトンレサップ湖などに行き、午後は各自自由に時間を過ごした。インターンの業務として、アンコール遺跡で遺跡維持の鍵を握るくらい重要な「バライ」という貯水池に重点を置く北バライチームと西バライチーム、余剰人口の移動を目的としてつくられたルンタエク・エコビレッジの管理チーム、地域住民の暮らしや伝統的なクメール建築に重点を置くコミュニティチームの4チームがあり、日交代ですべてのチームでの業務を行った。北バライでは景観と水の関係、西バライではバライに生息する魚類などの生態の調査、ルンタエクでは植林や学校見学、コミュニティチームではルンタエクのまちづくりのモデルとなった村の見学やクメール伝統建築についての見学を行った。



写真1. 歴史と信仰を語る彫刻

私はインターンシップを通して、参加動機である3つの目的を達成することができたと思う。まず遺跡と人々の暮らしと観光の結びつきであるが、世界遺産区域に住む人々の多くは主に世界中から訪れる観光客向けのお土産となる、牛革でつくる飾りのようなものや木

を切って作る動物型の置物などハンドクラフトを収入源としていた。コミュニティチームの業務の際などで実際に作っているところを何度か見させてもらったがその技術は本当に高度で驚くほどだった。なかには小さな子どもが作っている場合もあった。しかしこのように地域住民がつくるハンドクラフトはサイズが大きかったり持ち帰りにくい形であったり、実用的でなかったりと観光客目線で考えると少し問題点があると感じるものが多かった。

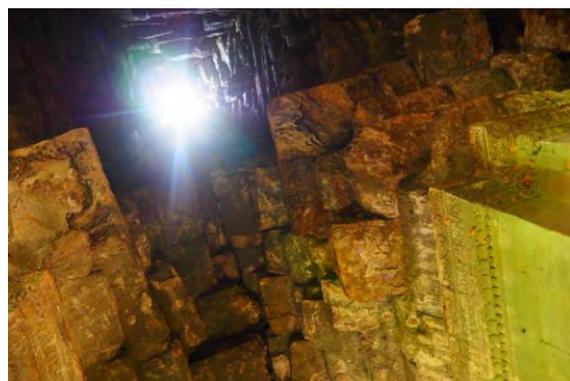


写真 2. 遺跡に差し込む光

また、どこの観光スポットへ行っても周辺住民が服や飲み物、絵などを売っている姿を何度も見かけた。彼らは訪れる観光客に合わせて売るための片言な外国語を使い分けていた。すごいと思ったのと同時に彼らも生活するのに必死で外国人相手に売っているのだろうと思った。観光利用として、ニュータウンであるルンタエクを活用させようとしていることも学んだ。人気の遺跡から離れたルンタエクであるが、ここにホームステイをしここでしか体験できないことをしてもらい取り組みもあるという。これはアンコールワットなどの人気の遺跡に集中してしまう人口を分散させるという取り組みでもあるが、あまりうまくは進んでいないということも伺い、これからの課題であるとわかった。ホームステイの建物はクメール建築の造りになっており、私も機会があればホームステイしてみたいと思った。

また、クメール伝統建築を伝える展示施設を訪れた時、観光のかたちの問題点に気付いた。この施設にはクメール伝統建築である高床式建築の歴史や構造を伝えるものが展示されており観光客など一般に開放・公開されているのではあるが、ここを訪れる観光客は少ない。ここには訪問者が感想を書くノートが設置されているのだが、そこに書かれた感想を読むと現地の人と欧米人の感想ばかりでアジア人の感想は一切なかった。人気の遺跡には多数のアジア人がいるがこのようなあまりメジャーでないところには訪れないと分かった。アジア人と欧米人の観光の仕方が違うようで、アジア人は有名どころばかりに行くが欧米人はさまざまところをゆっくりまわるという傾向があるらしい。もっとアジア人にもこの施設に足を運んでもらうために、アジアの言語表記を増やしたりガイドブックにもっと取り上げられるための取り組みを促進したりするべきだと感じた。

2 つ目の目的であった、途上国でのさまざまな経験や国際的視野を広げることであるが、この目的以前のことを 2 週間の滞在を経て気づいた。それは自分とは違う世界を正しく理解することだ。もともとカンボジアについての情報を日本で得ることは少なく、カンボジアに対して抱いていたイメージは汚い、危ない、遅れているとマイナスなものであったが、行ってみるとそのような状況がすべてではないと気づいた。場所によってさまざまで、シエムリアップ周辺は観光地であるため治安はかなりよく過ごしやすかったように思える。Pub

Street 周辺では夜、観光客でにぎわっており日本でも見かけるようなオシャレなお店も多かった。一方で、やはり今なお、地雷など危険な状態にある場所もあると聞き、同じ国でもさまざまな生活環境があると分かった。一部の面だけを見てその国すべてのことだと判断してはいけないと思った。

また、カンボジアの約 9 割は仏教徒でまち全体として宗教色が強かったのも日本とは異なる点だ。何度もオレンジ色の僧衣を着た僧侶を見かけ、世界の宗教事情への視野が広がった。日本ではできない体験として一番印象に残っているのはトゥクトゥクである。これは日本でいうタクシーのようなものであり、自分たちで価格交渉をしてひと乗り約 2 ドルで乗っていたのだが、そのトゥクトゥクのドライバーの勧誘がしつこかったが新鮮だった。日本人の私たちに近づいてきて「オネエサン〜カワイイネ〜ドコイク〜アジノモト〜 (?)」という勧誘が今では懐かしく恋しいくらいだ。

3つ目の目的として、おいしいものをいっぱい食べること！これはカンボジア到着してすぐに達成することができた。塚脇先生にはおいしいところへたくさん連れて行ってもらった。毎食絶品のフルーツシェイクを注文し店ごとに味比べをした（特に 4 度も連れて行ってもらった Pho Yong と Century Hotel のプールサイドで飲んだマンゴーシェイク！）。ハッピーアワーと呼ばれる時間にはビールやカクテルが日本ではありえないくらいの低価格で飲むことができ、みなでおしゃれなお店でのおすてきな時間を毎日楽しんだ。各国料理店が充実しているが、クメール料理で一番気に入ったものはアモック（ココナッツ風味のカレーのような親子丼のような料理）である。インターン学生の誕生日パーティーをした Amok のアモックの味が忘れられない。日本でも食べたいくらいだ。

公団の職員の方にもバイクでの業務場所への移動の際に通りがかった屋台の串焼きになったカエルやココナッツなど、珍しいものをたくさん食べさせていただいた。カエルはお店で食べるものより屋台の方がおいしかった（写真 3）。ここでしか食べられないと思い、食べないで後悔するよりも挑戦しようと思って食べた、市場で売っていたコオロギ（chang rat というらしい）などのいわゆるゲテモノも想像以上に



写真 3. 人生初体験のカエル

おいしかった。挑戦してみてよかったと思った。とにかく食に関して全く不自由な思いや具合が悪くなったりすることなく満足することができた。

インターンシップの 2 週間で、何度も現地の子どもたちと触れ合う機会があった。私は、なぜか子どもに好かれることが多くてとてもうれしいことではあったが、いろいろなことを考えるきっかけとなった。観光地の行く先々で出会う売り子の子ども、ハンドクラフトをつくる子ども、学校から下校途中の子ども、両親はいなくても家のような児童施設で元気よ

く暮らす子ども、現地の人向けの市場で寄ってきて、コオロギをたくさんあげたら喜んで食べ、最後にはあげたはずのコオロギを私に「あーん」して食べさせてくれた子ども、トンレサップ湖の水上学校へボートを漕いで通う子ども、私たちが食事を取っているところに残飯を求めて拾い集めに寄ってきた子ども、ルンタエクのモデルとなった村を訪れた時に見慣れない外国人の私たちを不思議そうに見ながら最後までついてきてかけっこまでして遊んだ子ども、,, 同じ国にいてもこんなにいろいろな子どもたちがいることに驚いた。日本では学校に行くことは当たり前だが、学校へは行けない子どもたちも世界ではまだいるということを目で見て強く感じた。学校に行くということは基本的だがとても重要なことで、学校へ通って勉強できるという環境や生活に感謝するとともに、行けない子どもたちのために何かしてあげたいと思うようになった。カンボジアでの子どもたちと触れ合った経験は一生忘れないものとなり、今後の人生で何か彼らの役に立つようなことをしたいという決心のきっかけになった。



写真 4. 元気いっぱいな子どもたち

公団の職員の方々や現地で毎日お世話になったドライバーのペンさんとのクメール語のレッスンも印象深い。業務の際は英語でやりとりをしたが、基本的な言葉や業務中に出てくる簡単な単語などのクメール語をたくさん教わった。クメール語を教わる代わりに日本語を教えてあげ、仲良くなった職員の方とは帰国後も連絡を取って、クメール語・日本語講座をしている。私はインターンの学生の中で一番多くのクメール語を教わった自信があるが、現地の人と会話する際あいさつなど簡単な言葉はクメール語を使ったほうがよりコミュニケーションが深まる気がした。子どもたちは英語が使えないためほとんど言葉が通じないが、クメール語を少し使うと、何を言っているのかわからないけれどいろいろと言葉を返してくれた。私になついてくれた子どもたちは、花を指さして「ふかー、ふかー」と言い、花の言い方を教えてくれた。そんな子どもたちにクメール語で名前と年齢を尋ね、将来の夢についてきいてみたのだが、男の子のほとんどは照れたり首を振ったりしたが、女の子のなかに「音楽の先生になりたい。」と答えてくれた子がいて、クメール語が通じたこととその女の子の素敵な将来の夢に、インタビューをしたインターン学生の三輪さんと喜びを感じた。この将来の夢調査はとてもおもしろいものであった。英語は世界共通で便利なものであることは確かだが、現地の言葉を学ぶこともコミュニケーション上とても大切なことであるということを知った。

最後に、このアンコール世界遺産インターンシップに参加して業務中・業務外を問わず、本当に多くのことを学び感じる事ができた。それらは私にとってとても意味のあるものとなり、国際的な事柄を考える際の刺激になるものになった。今後の生活や進路、人生にど

う生かしていくかをよく考え、この貴重な体験を国際貢献や国際協力の面でこれからはうまく繋げていきたい。このインターンシップを行うにあたり事前説明から帰国後まで大変お世話になった塚脇先生をはじめ、小松短期大学の木村さん、チューターのお二人、とても多忙にもかかわらず私たちを受け入れてくださったアプサラ公団の方々、ドライバーのペンさん、時間をともにしたインターンメンバー、ほかさまざまな場面でこのような素晴らしい機会を与えてくださったみなさまに感謝したい。

## 2) カンボジアで過ごした特別な 2 週間

金沢大学人間社会学域人文学類 2 年 今井菜緒 (グループ 1)

今回私がこのインターンシップに応募したのは、昨年度開講された塚脇先生の授業でこのインターンについて紹介がされており、そのときに「行ってみたい!」と思ったからです。私は学類での専攻で、文化遺産の保護について学んでいるので、多くの日本人が一度は訪れてみたいと思うアンコール遺跡群のあるカンボジアでの文化遺産の保護や観光とのつながりについて現地で見たいなと思って参加を決めました。

カンボジアでは、アンコール遺跡群の整備を行うアプサラ公団の方々にお世話になりました。業務は、午前中に視察を行い、説明を聞き、午後には午前中のフィードバックをするという内容でした。4つのグループに分かれての活動でしたが、今回はすべての部門を見てまわることができました。

ひとつ目は、「伝統的な住居」のグループです。1日目には、ロリュオス遺跡群の3つの遺跡バコン、プリア・コー、ロレイを訪れ、人々の信仰について学びました。かつては Hari Haralaya と呼ばれ、インドラヴァルマン 1 世が都と決めました。ヒンドゥー教の寺院のため、その神々の彫刻が施されていました。公団の方が、それらの彫刻を見ながら神話について教えて下さりました。ロレイ遺跡の傍らには、仏教の寺院があり、昔の信仰の対象と今のものが共存していることを感じました。遺跡のそばでは、まだ小学生くらいの少年が懸命に牛の皮を使ったお土産品を作っていました。アンコール遺跡群の中に住む人々にとって、生活していくための手段は、農業や牛などの家畜を飼うこと、魚を釣ることの他に、観光業が大きな割合を占めています。ハンドクラフトを作ったり、ココナッツジュースを売ったり、他にも本当に色々な方法でお金を得ています (写真 1)。



写真 1. ココナッツジュースを売るお兄さん

印象的なのは、上にも挙げたように多くの子供が商売に関わっているということです。遺跡の周りを歩いていると小さな子供がたくさん寄ってきて、「One dollar!」と言いながらお土産を買ってもらおうとついてきます。公団の方は、寺を守るためには、周辺環境も一緒に守ることが大切であるとおっしゃっていました。それは、観光資源としての遺跡と地域住民が深く関わっているからではないかなと思います。遺跡の問題としては、盗掘が挙げられます。フランス、タイをはじめとする国々が彫刻を削り取って高価で売っているそうです。アンコール遺跡群の約 400 平方キロメートルのエリアには、100 前後の遺跡があります。カ

ンボジア政府は、その多すぎる遺跡の数のため、すべてに手を付けることができず、アンコールワットをはじめとした観光客に人気な遺跡が優先されてしまいます。盗まれてしまった像の中には、いまだに回収されていないものもたくさんあります。

別の日には、カンボジア古来の伝統的なつくりの家で暮らしている村を訪問しました。家の造りは、高床式となっており、床下では風がよくとおるのでとても涼しいです。日中はここでご飯を食べたり、ゆったりとくつろいだりします。ハンモックでぐっすり眠っているおばあちゃんや、勉強を頑張ってやっている小さな男の子をみかけました。村の中心には”ほこら”があって、人々は何か問題があったときや、農業がうまくいってほしいときなどにそこに行って祈ります。村の中には、井戸があり、水を共同で使っているそうです。また、食べ物も共有しています。昔から、家と家の境界線があまりなく、村の人々が深いつながりをもっていると分かりました。子供たちが走りまわって遊び、ローカルマーケットでは、お母さんたちが会話をしている様子を見て、村の中にはゆったりとした時間が流れるのを感じました。この日の午後のフィードバックでは、村の人々にとって伝統的な昔ながらの住居に住むことが良いのかどうかについて考えました。現代の先進国のように、部屋にエアコンや冷蔵庫があった方が、より快適で過ごしやすいかもしれませんが、伝統的な生活文化を色濃く残す住居が失われてしまうことが残念であるし、より個人化が図られて人々のつながりが薄くなってしまう可能性があります。これは、非常に難しい問題だなと思いました。

一方で、新しい住居がつくられています。それは、ルンタエク村と呼ばれ、カンボジア政府によって新しく建設されました。世界遺産公園の中では、新しく、奇抜な住居を建てるのが禁止されています。しかしながら、人口は増加してきているため、政府はその人々を郊外の新しく開発された村に住まわせることにしました。ここは、シェムリアップから30キロメートルほど離れた郊外に位置しており、政府は無償で1家族1件家を貸しています。

この村では、エネルギーを無駄にしないカンボジア古来の伝統的暮らしをしています。指導者が農業を教えており、養鶏をしたり、魚や野菜を育てたりして、自分の育てたものを食べて暮らしています。現在では、エコビレッジを観光向けに開発する試みがなされています。観光客に、ホームステイをしてもらって村の暮らしを体験してもらおうというものです。今は月1で観光客がくるという段階ですが、準備ができれば毎日やっていくつもりだそうです。

カンボジアにきて、電気がないところで生活をし、夜になれば満天の星空を見ることができるといのは、なかなか魅力的だと思いました。しかしながら、村の中にカンボジア人にとって大切な寺院がない、さまざまな面での生活の不便さというのは大きな問題であり、どのように対処していくか考えられるべきところでもあります。

次に北バライ、西バライについてです。



写真2. 西バライの景観

(写真 2) バライとは貯水池を意味し、カンボジアにある古代からのシステムです。バライの持つ役割は、地下水を供給し、灌漑農業に使用し、街の人々に水を供給するという事です。また、貯めておく水の量の調節により、洪水を防ぐこともできます。このように、バライは、アンコール公園地域に住む人々にとって必要不可欠な存在です。

バライは、地面に穴を掘ってつくられているのではなく、**dyke** と呼ばれる堤防をたて、その中に水が貯められています。バライの真ん中には、**Mebon** と呼ばれる寺が必ず建っています。水は、この **Mebon** の基盤構造を安定させる役割もしています。北バライでは、ニャックポアン寺という興味深い場所を訪れました。ここでは、中央の大きな池の周りを小さな四つの池が囲んでおり、象、人、ライオン、馬の彫刻がついています。それぞれ水、土、火、風を意味します。中央の池には北バライの水が地下を通り、パイプなしに地下から染み入るという形で入ってきます。水位が上がると、四方の動物たちの口から水が出て、この水を浴びると病気が治るといわれ、古代には病院として使われていました。

カンボジアでの業務は、すべて英語だったので不安も大きかったですが、私が見つからないときは、公団の方が懲りずに説明をもう一度してくれ、理解することができました。カンボジアの人も私たちも英語が第一言語ではなく、お互いのコミュニケーションの手段としての英語の大切さを感じました。公団のかたが熱心に伝えようとしている姿をみて、私自身も自分の意見をより英語で表現できるように頑張らなければならないなと思いました。

カンボジアでの経験は、毎日が新しい体験であり、面白いものでした。業務場所への道のりは、公団の方がバイクに乗せて送ってくださるのですが、シェムリアップのにぎやかな街中や、たくさん牛のいる西バライの広大でこぼこした土地をバイクで通ったことは私にカンボジアにいるのだなということを実感させました。業務後には孤児院を訪問したり、ナイトマーケットに行き買い物で人生初の



写真 3. カンボジア伝統料理の店で

ねぎりをしたりしました。カンボジアは物価が日本の 3 分の 1 ほどなので、日本では高くてなかなか行けないようなマッサージやネイルも十分に楽しみました。休日には、アンコールワットをはじめとした遺跡やトンレサップ湖なども訪れました。食べ物は、カンボジア料理をはじめとしていろいろなものを食べました。(写真 3) スイーツやシェイクなど甘いものの店によく行きましたが、とてもおいしく、日本に帰った今でもたまに食べたくなります。

今回のカンボジアでの経験で得たことは、とても大きいです。実際に現場でみて肌で感じることで、自分が想像していたカンボジアのイメージが変わりましたし、自分の興味の分野も広がりました。また、カンボジアでは人の優しさに触れました。目が合えば、微笑みかけてくれるし、マーケットでは「日本人？旅行を楽しんでね」などと話しかけてくれるお姉さ

んなんかもいました。このまま日本にいる間に忘れていって、この素晴らしい経験への思いが弱くなる前に、カンボジアで感じたことを原動力にして自分の次の段階へと進みたいです。最後に、現地でお世話になった、公団の方、塚脇先生、木村先生、チューターのお二人、一緒に参加した皆さんに感謝致します。ありがとうございました。



写真 4. 孤児院にて

### 3) JAPANESE APSARA!

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年 濱崎佳奈 (グループ 2)

8 月 21 日から 9 月 4 日までの約 2 週間、カンボジアのアンコール世界遺跡整備公団へのインターンシップに参加した。私がこのインターンシップへの参加を希望した理由は、主に 2 つあった。1 つ目は、アンコール世界遺産における観光産業と地域住民の生活との共存の現状を自分の目で見てみたかったからである。アンコール遺跡は世界で数少ない、世界遺産の中で人が暮らす遺跡である。この場所でインターンシップを行うことは、観光と生活をどのように共栄させていくことができるのかを勉強するよい機会になると考えた。

理由の 2 つ目は、自身の英語能力を向上させたいと考えたからである。英語で仕事とともに行うことを通して、ディスカッション能力や自分から積極的に発言する力を伸ばしたいと考えた。実際このインターンシップでは、業務は全て英語で行われるのでほとんど 1 日中英語を話して聞いて生活をする事ができる。カンボジアの公用語はクメール語なので英語は母語ではないが、スーパーや飲食店などでも英語が通じるため、不自由せずに生活ができた。この環境で約 2 週間生活をする事によって、英語を話す力・聞く力は向上させることができたと考える。

今年度のインターンシップでは、昨年度までとは少し異なり 1 か所の業務に集中的に携わるのではなく、ルンタエク・エコビレッジ、西バライ、北バライ、クメールの伝統建築やそのモデルハウスなどの様々な場所を訪れ、その各場所の問題点やこれからの課題などについて学んだ。私が一番初めに訪れた場所は、ルンタエクである。この村は中心地であるアンコール遺跡からバイクで約 1 時間行ったところにある、新しく開発されている農村である。アンコール世界遺産内部で増えすぎた人口をこの村に移して、アンコール遺跡を保護しようという試みにより、村の開発が進められている。ルンタエクでは、有機農業でバナナやパパイヤなどのフルーツを栽培したり、堆肥を作ったりしている現場を見学することができた (写真 1)。



写真 1. ルンタエクのモデルハウス

ルンタエクを初めて訪れた時、私はルンタエクのきちんと整備された区画や景観の美しさに驚いた。家の間隔はあらかじめ決められておりその計画に沿って建設されているし、一軒の家にかかる建設費用はカンボジアの平均建設費用に比べてかなり高額であるようだ。またルンタエクでは、アンコール遺跡から移住してきた人々に家が無償で貸しているということは私にとって、とても衝撃的であった。また、アンコール遺跡内では家を持っていない人々もルンタエクでは家を持つことができるし、

もしそのままルンタエクに住み続けたければいつまでも家を借りることができるという。遺跡の保護をするために、それに連動する計画にも多額の資金が投資されているのだと感じた。

ルンタエクは現在、昔ながらの伝統的な暮らしを目指す傍ら、観光業で村を活性化させようとしており、その計画として観光客をホームステイとして受け入れる案があるということを知り、その計画として観光客をホームステイとして受け入れるためにはまだまだ体制が整っていないと感じた。まず観光客がルンタエクまで行く手段がないということ。そして、エコビレッジということで、電気を発電する施設が全くと言えるほどないこと。最終日に公団の方と面談を行った際には、これらの問題点に対する自分の意見として、中心部のアンコール遺跡からルンタエクまでバスを通し観光客が公共交通機関でルンタエクまで行けるようにする必要があるという意見を出した。また電気に関しては、エコビレッジということ踏まえ、化石燃料などのエネルギーは使えないけれど、太陽光発電や風力発電を取り入れてみてはどうかという意見を出した。しかし、日本では実現可能な案であっても、経済状況や技術力が異なるカンボジアにとっては自分の出す案は果たして現実的なのだろうか悩むことも多かった。アンコール遺跡から離れたルンタエクに住民が安定して住み、観光客もホームステイとして来るようになるのにはまだ多くの計画や時間を要するのだろうと感じた（写真2）。



写真2. 公団の方との面談

カンボジアでは、業務以外にもたくさんの新しい経験をすることができた。平日の夜はトゥクトゥクでナイトマーケットに行き、ご飯を食べたり買い物をしたり、マッサージしてもらったりした。また、自分で店員さんと値段交渉をしてズボンを2ドルで買ったり、ハンモックを高値で買ってしまったりと、活気にあふれるナイトマーケットでの買い物はとても楽しかった。休日はバイヨン寺院やトンレサップ湖、タプローム遺跡などの様々な観光地を訪れた（写真3）。エリート集団であるアプサラ公団の制服に金沢大学のロゴステッカーを付けて遺跡を訪れると、日本人や中国人の観光客から「Japanese APSARA!」や「Kanazawa!」と言ってもらえたりして嬉しかった。2週間の間で、カンボジアの多くの有名観光地を回ることができ、業務以外の時間もとても充実したものとなったと強く感じている。



写真3. 休日、蓮池にて

私が実際にカンボジアに行く前に、カンボジアに対して抱いていたイメージは正直「貧しい」「子供たちが空腹である」「教育環境が整えられていない」といったマイナスイメージのものが多くあった。私は今まで東南アジアに行ったことがなくその地域の実際の現状を理解していなかったため、「国の経済が豊かでない＝人々の生活が豊かでない」と安直に考えていた。しかし、実際にカンボジアを訪れてみるとその考えは大きく間違っていたと痛感し、反省することとなった。カンボジアは確かに発展途上であり経済的には豊かではない。だが、その国で暮らす人々は笑顔を絶やさず、大人も子供も驚くほど生き生きと生活を営んでいた。目が合うとキラキラした笑顔で手を振ってくれる子供たちもいた。また、訪れたどの村の人たちも皆、外国人である私たちに全く壁を作らず優しく接してくれた。

今回のインターンシップでも例年同様、平日の夕方から夜にかけて孤児院を訪問する機会を設けていただいた。私は孤児院を訪問したこの経験が大変印象に残っている。その理由は、施設で生活する子供たちがあまりにもエネルギーに溢れていて楽しそうだったからである。孤児院ということで、両親がおらずきつと寂しい経験をしてきたはずであるが、子供たちはそんな経験を微塵も感じさせないくらいとても明るく生きていた。施設で私たちは子供たちと一緒に折り紙をしたり、風船でバレーボールをしたりシャボン玉を吹いたり楽しい時間を過ごすことができた（写真4）。まだ8歳の女の子と折り紙で遊んでいたときに、女の子が私に色々な折り紙の折り方を教えてくれた。彼女は私より断然よく折り紙での遊び方を知っていた。これには完敗である。どの子も私たちと遊ぶのをとても楽しんでくれていたのが嬉しく、最後お別れするのは非常に名残惜しいものであった。私は、暖かく生き生きとした心を持っているカンボジアの人々を、心から素敵だなと感じた。



写真4. 孤児院の子供たちと一緒に

このインターンシップに参加したことにより、発展途上と呼ばれる国で世界遺産を保護するとはどういうことかを理解することができた。ヨーロッパやアジアの先進的な国々がカンボジアと協力して一つ一つの場所を修復しているため、先進諸国とカンボジアの間に求める方向性の違いが生じるのはもちろんあるが、先進諸国同士での意見の食い違いや衝突もあつたりするということを学んだ。国際的な問題をこのように現場に近い場所で学ぶことができたことは、自分自身にとって大変よい経験になったと感じる。この2週間で得た様々な経験や知識をこれからの学生生活や今後の活動に活かしていきたいと考える。

最後に、このインターンでお世話になった塚脇先生、木村先生、大学関係者の方々、アプサラ公団の方々、インターンのメンバーに感謝して、この報告書の締めくくりとする。

#### 4) インターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年 須田瑞帆 (グループ 2)

私がこのインターンシップに参加した理由は、途上国支援に興味があるからで、人々の生活、遺跡と地域住民との関わり方などについて知りたいと思ったからです。それに加え、単純にカンボジアとはどのような国なのか、アンコールワットとはどのような場所なのか実際に見てみたいと思い、このプログラムに応募しました。

今年度の業務では、ルンタエコビレッジ、北バライ、西バライ、クメールハビタットの 4 つの場所すべてを見ることができました。私が最初に行ったのは、ルンタエコビレッジです (写真 1)。もともとこのインターンシップの中でも、一番興味のある場所でした。アンコール遺跡群の中では、新しく家を建てたり、奇抜な建造物を建てるのが制限されています。そのため生じた余剰人口を利用して開発を行うことを目的とした村が、このルンタ



写真 1. ルンタエコビレッジのモデルハウス

エコビレッジで、広さは 1,012 ヘクタール、現在約 120 世帯が暮らしています。エコビレッジの住民には、政府から 1 ヘクタールの土地に建てられた一軒家が無償で与えられます。農業をする人、お土産を作る人、都市部に出て働く人など、収入の得方はさまざまです。都市部に出て働くと言っても、エコビレッジは都市部からかなり離れています。私たちは、公団の方とバイクで 1 時間弱かけてエコビレッジに行ったので、働きに出る人の大変さを身に染みて感じました。また、都市部から離れている上に公共交通機関がないため、観光客が来づらく、観光地として活用しきれていないという問題もあります。観光客向けのホームステイも行われていますが、月に 1, 2 組という現状だと聞きました。しかし、実際に訪れると、カンボジアの伝統的な暮らし、豊かな自然に囲まれて生活できるこの村は、本当に魅力的だと感じました。もっともこの村の魅力を、色々な人に知ってもらいたいと思いました。

次に行ったのは、西バライです。まず、バライというものを初めて見たので、その大きさに驚きました。バライには、水量を調節することで洪水を防ぎ、市街地を守る、バライの中心にある寺院の土台を安定させる、灌漑、生活用の水を貯える、地下水を維持する、という重要な役割があることを学びました。しかし、堤防はかつての伐採によって浸食され、現在その進行を防ぐために植林が行われています。ここには、夕日と朝日を見ることができるスペースやマーケット、バライで泳ぐことができるため、海水浴場のようにパラソルがあった

りと、観光客向けに整備されていました。しかし、観光客らしき人は非常に少なく、観光客を呼び込むアイデアや、改善が必要であると感じました。

次に、北バライへ行きました。私たちはまず、北バライにあるダムを見に行きました。そのダムは山から街への水をコントロールし、洪水を防ぐ役割があります。また、その水は人々の生活用水だけでなく、遺跡の保護にも使用されます。重要であるダムやゲートでの水の調節ですが、手動で管理されていると聞き驚きました(写真2)。その後、北バライの観光スポットであるニャックポワンを見に行きました。ニャックポワンはバライ内にあり、そこまでは橋を歩いていきました。左右に見渡す北バライは本当にきれいで、木々と自然の風景に圧倒されました。しかし、この木々は問題にもなっています。7年前にバライに入水した際木が枯れてしまい、枯れた木々の富栄養化によってリンが発生し、水の汚染の危険があります。木を切ってしまうのはよいのではと思うところですが、この枯れた木々による風景が趣深いと欧米人にうけ、木を切りにくい状況にあるそうです。北バライは水の供給が最優先されなければならないことを考えると、観光と機能面との兼ね合いがとても難しいなと感じました。



写真2. 北バライのゲートで

最後はクメールハビタットという、カンボジアの伝統的な住居を見に行きました。カンボジアの家はグランドフロアとファーストフロアに分かれていて、高床の作りになっています。これは、気温が高いカンボジアの気候に合わせた作りで、実際に入ってみると、風通しがよくとても快適でした。クメールハビタットは、歴史の中で移民の影響を受けるなどして、形を変えながら現在に至ります。人々の生活スタイル、その土地にあった家々は、たくさんの工夫がされていることがわかりました。

業務中はもちろん英語で会話をします。最初は不安でしたが、職員の方々は本当に優しく、わかるように説明し、私たちの質問にも丁寧に答えてくださったおかげで安心して業務に取り組むことができました。たくさんの場所に行き、多くの情報を得たことで混乱してしまった時も、職員の方々は一緒に復習してくださり、理解することができました。

業務後、休日にも有意義な時間を過ごすことができました。食事の時間は、毎日の楽しみでした。カンボジアの食べ物は本当においしいです。私は初めての海外というこ



写真3. 大好きなアイスクリーム

ともあり、行く前は食べ物に若干の不安がありました。しかし、カンボジアに着いてからは、毎日おいしいものを食べられて本当に幸せでした。フルーツが特に美味しくて、スムージーやアイスは数え切れないほど食べました（写真 3）。食事以外の自由時間は、だいたい買い物をしていました。最初は近くのショッピングモールに行くだけでも、見たことのない食材やお菓子があってワクワクしていましたが、慣れてくると、ちょっと近所のスーパーに行くような感覚にまでなりました。マーケットでは服をみたり、雑貨をみたり、ネイルをしたり、飽きることなく毎日楽しんでいました。人生初の値切りが成功した時の喜びは忘れられません。日に日に、店員さんに対して強気になっていった気がします。

土日はトンレサップ湖に行ったり、エステに行ったりしました。トンレサップ湖では、水上住宅に住む人々の暮らしや自然を見ることができました。風を切りながら進むクルージングは、とても気持ちよかったです（写真 4）。エステは本格的で、日本だったらいくらするだろうというものを、カンボジア価格で受けられて大満足でした。今回のインターンシップのメンバー2人が、インターン期間に誕生日を迎えたの



写真 4. トンレサップ湖でのクルージング

で、お祝いできたこともとても印象に残っています。メンバーの部屋にみんなで突撃するというサプライズをしたり、バースデーパーティーでは、見たこともないくらい大きなケーキを食べたり、皆仲が良く、メンバーと過ごす時間はとても楽しかったです。

カンボジアでは、見るもの聞くもの、すべてが新しく刺激的、たくさんのものを吸収して考えた日々でした。遺跡に到着して車を降りると駆け寄ってくる売り子たち。この子たちは学校に行っていないのか、毎日物を売っているのか、どこへいってもたくさんいる売り子の子供たちを見て、色々なことを考えさせられました。マーケットへ行く途中の橋には、小さい子供を抱えながらお金をねだる女性、アンコールワットに行って公団の方々と一緒に昼食を食べたときには、私たちが食べているところに近寄ってきて、「これ、ちょうだい。」とねだる子供たちもいました。そういう光景を見るたびに、貧困というものを目の当たりにした気がしたし、心が痛くなりました。私はこういう人たちに何ができるんだろう、どうやったらこういう人たちを減らすことができるんだろう、と考えたりもしました。

休日お土産屋さんで出会ったマダムサチコのアンコールクッキー。その箱の裏には、クッキーが若い人たちに雇用の場を与えていることが書かれていました。バイクで業務に向かう途中、公団の方が「これは日本が建てた学校だよ。」と教えてくれたこともありました。このように、カンボジアに行き、日本の支援や、日本とカンボジアの関係の深さを知り、私も将来、カンボジアなどの貧しい国の人々に何かしたいという想いが強くなりました。人々の現状を知ることができた、改めて裕福な国、人ばかりじゃないと思えたことは、私にとつ

て大きなことです。

一方で、貧しさを感じないこともたくさんありました。街でものを売っている人、食事をしている人、道端で話している人、みんな本当に楽しそうでした。目があったら微笑んでくれて、迷子になったら助けてくれて、常連になった店の店員さんは顔を覚えてくれて、人が本当に暖かい国だと感じました。日本にいる時よりも、人々の活気や充実感を感じることはばかりでした。行かなかつたら絶対にわからなかつたカンボジアの良さを、たくさん発見できた2週間でした。

今回このインターンシップに参加できて、このような貴重な体験ができたことを本当に嬉しく思います。カンボジアで得たことを、これからの学生生活に活かして頑張っていきたいと思います。お世話になった塚脇先生、小松短大の木村先生、チューターの麻実さん、野乃花さん、アプサラ公団の職員の方々、その他サポートしてくださった方々に心から感謝します。

## 5) カンボジア派遣での成長

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年 伊藤果穂 (グループ 3)

カンボジア派遣初日から日本に帰国する最終日まで、実にあっという間の 15 日間であった。15 日という限られた期間の中で、本当に多くの物を見て感じ、実際に体験することが出来た。この報告書を通して、今後このプログラムへ興味をもった方に、私自身が感じたことを少しでも伝えることができたと思う。

まず私が今回のカンボジア派遣に参加したいと考えた最初のきっかけになったのは、2015 年度の第 6 回派遣報告会である。報告会の存在は、学内に掲示されていたポスターで知った。その時からカンボジアという国に対する興味や関心はあったものの、カンボジアに対する知識を持っていない自分が興味本位で行って良いのだろうかという疑問のほうが大きかった。しかし、この疑問は、報告会で派遣された方のお話を実際に聞くことにより解消された。「このチャンスを逃してはいけない」そう思った私は、2016 年度の派遣に応募を決めた。今回のプログラムに参加するにあたって、カンボジアを含む東南アジアに関する書籍や記事を読んだり、過去に派遣に参加された方に感想を聞いたりしたが、見聞きした情報はあくまで予備知識であり、実際に自分が行って見ないと分からない事が多く存在することを今回の研修中に思い知るようになった。

カンボジアでは、国立アンコール遺跡整備公団（通称アプサラ公団。以下アプサラ公団と記載）での業務に従事させて頂いた。活動場所は、1) 西バライ、2) 北バライ、3) クメールハビタット（地域住民支援）、4) ルン・タ・エク村の 4 か所で、それぞれの場所で 2~3 人のグループに分かれて業務を行った。約 2 週間の業務期間の中で、最初の 4 日間はこの 4 か所を 1 か所ずつ周り、それぞれの箇所のもつ役割を学んだ。アプサラ公団の職員の方にもそれぞれ担当業務があるとの事で、各地での説明の際には、私たち学生にも分かるよう丁寧に時間をかけて説明して下さった。もちろん、説明の中には分からない単語が多く含まれる。随時、説明してほしいと積極的に尋ねる事でより深い理解を得る事が出来たため、質問することを恐れてはいけないと感じた。アプサラ公団の職員の方々も、1つ1つの質問に対して真摯に受け答えして下さい、真剣に学ぼうという姿勢がより強まった。

私のいたグループ 3 はまず、西バライの業務を担当することになった。朝 8 時、ホテルの前にアプサラ公団の職員の方がバイクで迎えに来てくださったのだが、同じグリーン制服を着た大勢の職員の方々がバイクで待機している姿に朝から驚かされた。私を乗せて下さるといふ職員のソウエンさんに、「バイクに乗るのは生まれて初めて」と伝えると、彼は西バライに着くまで、終始後ろに乗る私を気にしながら運転してくれた。そのお陰で、2 日目からは安心してバイクに乗る事が出来た。バイクに揺られるのはとても心地が良く、他グループの参加生徒の中には気付いたらバイクの後ろで寝てしまっていたという強者もいた。西バライに到着後、その役割についての説明を受けた。バライは貯水池という意味であ

り、「タタカ」とも呼ばれる。それぞれのバライには王様の名前が付けられており、一番古いもので9世紀に造られた「インドラタタカ」がある。西バライは「スーリヤタタカ」とも呼ばれ、当時の王であるスーリヤヴァルマン2世により11世紀に完成させられた貯水池であると言われている。複数ある貯水池の中でも東西に2.2 km、南北に8 kmと最大の規模を誇る西バライは、海のように広大であった。西バライで



写真1. 西バライでの業務の合間に

は水の管理方法やその仕組み、「ダイク」と呼ばれる貯水池を囲む土の壁やそれが崩れるのを防止するためのグリーンベルト活動、西バライ周辺で商売を営む人々の生活について実際に各所を周りながら説明を受けた（写真1）。

西バライの説明を受けた後、職員の方に「ここからでも見えるけど、近くに行きたい？」と尋ねられ、「はい、ぜひお願いします！」と答えたところ、ダイクの修復現場を間近で見せて頂いたり、植林のために用いられる「ベチバー」という植物の苗を育てている現場に連れて行ってもらったりすることが出来た。修復現場では地元の方がバケツリレー方式で土を運び出し、切り出された箇所では地層を細かく種類別に判別する作業が行われていた。切り出しには機械を使う一方でどうして土を運び出すのを機械で行わないのか尋ねると、一部にはコスト削減という理由もあるが、地元の住民たちに職を与え従事してもらうためというのが一番の理由であるとのこと。確かに、植林のための苗を育てる作業においても、栽培の現場に寝泊まりしている人を含めたスタッフのうち、ほとんどがアプサラ公団の職員ではなく地元の方々の方々であった。説明してくれた職員の方は、「西バライは地域住民に水を供給するだけでなく、水害を避けるために存在する必要不可欠なもので、古代の人々の知恵により作られた大切な貯水池である。私たちはこの貯水池を、新しい技術に頼るばかりでなく、時間はかかったとしても自分たちの手で守りたい」と私たちに話した。

西バライの修復にはまだ時間がかかるという。話によると、2007年までこの西バライの周りを囲むダイクには木が生い茂っていたが、これらの木の伐採により土壌が侵食されたため、西バライを囲っていたダイクが一部壊れてしまった。今はこのダイクを構成する土を古いものから新しいものへ変える作業をしているというが、新しい土は山から現場まで運び出すのに時間も労力もかかるという。私は以前、岩手県の陸前高田市にボランティアで訪れた際に見た、巨大なベルトコンベアの事を思い出した。土地のかさ上げのために使われる山から切り崩された大量の土を、全長3キロの巨大なベルトコンベアを延長したり方向を変えたりして現場まで運ぶというものである。この話をするとアプサラ公団の職員の方に東日本大震災の復興事業に興味をもっており、技術的な側面から調べているという方がいた。意外なところで話が繋がったが、彼は「莫大な費用はかけられないし同じことが出来な

いのは仕方が無いけれど、日本人のアイデアにはいつも驚かされる」と話していた。

次に訪れたのは「ルン・タ・エク村」である(写真2)。「エコヴィレッジ」とも呼ばれるこの村は、アンコール保護地域では地域内の民家の数を一定数以上増やすことが禁止されているため、保護地域に新しい家を建てることができない住民たちのために造られた。また、この村がエコヴィレッジと呼ばれる所以は、住人たちに伝統的なクメールの家で自給自足の「エコな生活」を送ってもらうことを目標として掲げ



写真2. エコヴィレッジの看板と自然

ているためである。約 1,012 ヘクタールあるこの村には現在、105 軒(うち 5 軒はモデルハウス)の家が建っているが、将来的には同じような村を 5 つ増やし、約 800 世帯が住むようにしたいという。それぞれの家庭には家を建てる素材と植物を育てるための庭、更には作物を育てるための畑が援助される。好条件だと感じるが、この村の抱える問題は、移り住む人々が少ない事だ。シェムリアップの市街地やアンコール保護地域からは遠く離れており、村の中の設備もまだ整っていないため、村と街とで 2 軒の家を行き来している世帯も少ない。エコヴィレッジはまだ発展途上ではあるが、将来的にはマーケットの開設や村で採れた有機栽培のものを使った食事の提供といった観光客向けのサービスも実施する予定だという。ホームステイは随時行っているそうだ。ホームステイは良いアイデアであり、私自身も実際にホームステイをしてみたいと感じる。村を訪れた際に見たのは、大きなため池、建設中の寺院、手洗い場、人々の住む家、バレーボールコート、畑、魚の養殖場、動物の飼育小屋などである。

村には他にも小学校が建てられており、訪れた時には帰りの会の真っ最中であった。授業では教科書が使われ、教師は黒板を使って板書をする。また、この小学校では衛生面の教育なども積極的に行っているそうだ。こちらにも「給食」の文化があったが、驚くことに日本のものとは大きく違っていた。それは、この学校で振舞われる給食というのはお昼ご飯ではなく、「朝ご飯」である点だ。朝早くに学校にやってきた子供たちは朝ご飯を食べ、授業を受ける。そしてお昼ご飯の時間(13 時頃)には、子供たちは授業を終え帰宅するのである。文化の違いがここでも垣間見えた。子供たちの中にはエコヴィレッジに住む子供もいれば、帰宅するために親のバイクの迎えを待つ子供もいた。歩きでは到底家までたどり着けないのだという。やはり、周りから外れた場所に位置するこの村では移動のための手段が必要不可欠であり、自分で移動手段を持つことができない小さな子供やお年寄り等にとっては住みづらいのではないだろうか。私たちグループ 3 は後日行われた話し合いで、公団側に市内周遊バスを設けるのはどうかという提案をした。周遊バスは、観光客だけでなく地元住民の足の役割も果たし、更に一部観光地へ集中している来場者たちを各観光地へ誘致する事

も可能になるのではないかと。答えとしては「バスを設けると、送迎をサービスとしている各旅行会社から反対の声が出るのではないかと。また、バスだけでなく道路の整備のための予算がかかるため実現は難しいと思う。しかし、アイデアは悪くない」との事であった。「エコヴィレッジの計画は、少しずつではあるが確実に進んでいる」職員の方のこの言葉に、私はいつかこの村を再訪してその発展を見たいと強く感じた。

次に訪れたのは「北バライ」だ。木でできた一本道があり、水面からは枯れた木が弱々しく伸びている。12世紀に出来た貯水池だそうだが、当時の様子とは大きく違っているのではないだろうか。規模も西バライに比べると小さいものであるが、私が北バライに対して驚いたのはその中の「ニャック・ポアン」という遺跡である。訪れる前日に職員の方が紙に図解で説明してくれていたためその仕組みについては知っていたが、実際に見るものはイメージしていたものの5倍ほどのスケールであった（写真3）。4方向に置かれた石造と、中心に位置する遺跡。遺跡やその横のドラゴンに彫られた彫刻の美しさに私は思わず「北バライ、やるな」と驚いた。残念だったのは、昨年まで入る事が出来た中に入ることが出来なくなってしまった事だ。私はカンボジアを訪れる際にはぜひここを訪れて欲しいと思うほど北バライの遺跡が好きになったのだが、将来的に木でできた一本道は取り壊されてしまうかもしれないというので非常に残念である。元々、洪水の影響で通れなくなった道の上に簡易的に作られたものらしいので仕方が無い。



写真3. 図解 北バライ

主な活動場所の4カ所のうち、最後に訪れたのは「コミュニティ」だった。ひとつの村であるが、この村を訪れた際には、アプサラ公団のグリーン制服を着た私たちに村中の子供たちが興味をもって近寄ってきた。村に住む人々はそれぞれ形の違う家に住んでいるが、5種類ある伝統的なクメールの家の形の違いを実際に見る事が出来た。村の中を歩いていると、そこら中にニワトリが歩いている。これではどこの家の所有物か分からない、と思ったが、この村の人々は気にしないのだそうだ。日本だったら、家と家の間に高い塀を作るものだが、この村ではニワトリはもちろん、人々も敷居関係なく暮らしており、村の中で人々のコミュニティが出来上がっていたのが印象的であった。中には気にする人もいるそうだが、「プライバシーが・・・」という考え方はあまり無いのかもしれない。人々は支え合って生活を共にしている、そんな印象を受けた。

別の日には、鹿児島大学の方の西バライでの魚の採集を手伝わせて頂く機会があった。この採集は、アプサラ公団の許可を得てのものである。私たちは地元の漁師の方が網で捕らえた魚を網から外して透明なビンに移し、後に種類ごとに分けるといった作業を行った。次々に網にかかる魚の量も種類も多く感じたが、この量をまだまだ少ないと言っていた鹿児島

大学の学生の方には「流石だ」としか言いようがない。魚の判別法や研究の奥深さについて教えて頂いた経験は、普段経験する事のない大変貴重なものであったと感じる。

今回のカンボジア派遣に参加するにあたり、自分の中で目標を1つ決めていた。それは、「国際機関で働く人々のコミュニケーションの取り方を知る」という目標である。実際に滞在中には、アプサラ公団の職員の方々と今回の派遣に際してお世話になった塚脇教授の会話などといったやり取りを間近で見ると、また、アプサラ公団の職員の方に直接質問する機会を頂いた際に直接お聞きする事が出来た。文化や考え方の違いによる苦勞も多いが、地元の職員ばかりではなかなか「良いアイデア」が出てこないのだという職員の方。また、遠慮をして発言しないよりはしてくれた方がありがたい、ともおっしゃっていた。「その点、塚脇教授はたくさんアドバイスや発言をしてくれるから。僕は大きい助かっている」と笑いながら言う職員さんの顔には「信頼」の表情が浮かんでいた。なるほど、と私は思ったと同時に、信頼関係の重要性に改めて気づかされたような気分になった。目標は無事達成する事が出来た。

またカンボジアでは、初めての経験を沢山させて頂いた。地元でお世話になっているという女性の家を訪れ家の中を見学させていただいたのだが、餅つきの要領で材料をつく白い素麺を作る機械というのを初めて見た。また、家の前にサトウキビジュースを作る機械が置いてあったため、以前沖縄で飲んだサトウキビジュースの話を運転手のペンさんにしたところ、「カンボジアのものと比べてみたら面白いかも」と、その場でジュースを買っていただいた。以前飲んだ時には味がしなかったのだが、カンボジアのものが甘く美味しかったのには驚いた。他にも、野生のサルを初めて、更に間近で見た事、アンコールの遺跡を見て回っているときに集合写真を撮ろうとしたら社員研修中であった地元の方々との合同集合写真になった事、ポカリスウェットに炭酸が入っていた事、向こうで飲んだスイカのシェイクが未だに恋しい事、蓮の花の咲く池に連れて行って頂いた際に蓮の実を初めて食べた事（周りからは不評だったが私は美味しいと感じた）、トンレサップ湖で水上生活を送る人々の生活を垣間見た事、ワニの養殖地を見た事、市場で売られている虫を食べた事、ゾウの背中に座り遺跡をぐるっと一周した事、アプサラダンスという花の咲く様子を手首を使って表現するというダンスがとても美しかった事、目の前で国際的な調印が行われ、式に参加させて頂いた事も初めての経験であった。例を挙げればきりが無いが、これらは全て、



写真4. ライチのようなランブータン

カンボジアインターンシップに参加しなければ経験する事が出来なかった事ばかりである（写真4）。

15日間という限られた期間の中で、本当に多くの出会いがあった。名前も知らない人と立ち話をしたり、同い年というホテルの受付の女性と顔を合わせるうちに仲良くなったり、声をかける事で様々な人との繋がりをもつ事が出来た。少しではあったが、カンボジアの人々を取り巻く環境や生活の様子、宗教観や考え方の違いなども垣間見ることが出来た。クメール語も教えてもらい、代わりに日本語を教えるといった機会もあった。また、滞在中には私たち日本人にとって当たり前なのがカンボジアでは当たり前でない事や、日本人は気にも留めないであろう物事をカンボジアに住む人々は無意識のうちに大切に暮らしている事を深く感じる事が多々あった。異文化の中での生活は私にとって、柔軟な考えを養い、自身を成長させる大きな原動力となるのではないか。そう考え参加した今回のカンボジア派遣であったが、予想以上に自分というのを見つめ直す機会を与えてくれるものであった。また、国際学を学ぶ上で、自らの文化を学ぶだけでなく異文化理解をより一層深める必要性があると感じた。今回のカンボジア派遣で得たものを今後の活動の中でどう活かせるか、また、社会に対し自分が貢献できる事は何か見つける事を今後の課題とし、またいつの日かカンボジアを訪れたいと思う。

## 6) ANOTHER SKY

金沢大学人間社会学域国際学類 3年 若林 唯 (グループ 3)

このインターンシップの存在を知る前の私は、周りの多くの友人の留学が決まっていく中で、留学への未練と違和感を抱いていました。現地で生活するからこそ学べることはたくさんあるだろうし、留学には憧れていたけど、私がしたいことは留学だったのかなど。そんなときにこのインターンシップの存在を知り、「現地の人と現地で働いてみる」ことに対して興味を抱き、今抱えている問いへの答えが見つかるかもしれないと思い、直感的に参加することを決めました。

参加を決めた理由は、2つありました。1つは先に述べたように、現地の職員の方と働くことができるから。もう1つは、以前と違った側面からカンボジアという国を見つめることができるから。2年前の大学1年生のころ、スタディーツアーでカンボジアを訪れたことがあり、そのプログラム内容が教育や歴史に重きを置いたものだったので、今回の環境保全や観光というテーマが盛り込まれたプログラム内容により一層魅力を感じていました。

インターンシップでお世話になったアンコール遺跡整備公団（以下、APSARA）は、世界遺産に指定されているアンコール遺跡群がある広大なエリアを管轄している組織で、仕事内容はさまざまでした。例年だと、アンコールエリアにある大きな貯水池である西バライ、北バライ、開発途中のルン・タエク・エコヴィレッジ、伝統的な建築様式や村について学べるクメール・ハビタントの4つのチームに分かれますが、今年は諸事情で途中から形態が変わり、すべての場所を訪れることになりました。私としてはラッキーな年でした。以下、それぞれの場所で学んだことについて述べていきたいと思います。

まず、西バライについて（写真1）。西バライは東西に8 km、南北に2.2 kmもある巨大な貯水池でアンコールエリアの主要な水源である地下水をサポートしたり、田んぼの灌漑に使用されたり、シムリアップの中心街へと供給されたり、洪水を減らしたりと役割の多さからその重要性がうかがえます。アンコールエリアにはバライと呼ばれる場所が4つありますが、機能しているのはこの西バライ



写真1. 大好きな西バライチーム

だけです。北バライの水は汚染されつつあり、東バライは水を貯めようにもその敷地内で人々が生活しているため使用できないという状況です。西バライの問題点は、建設途中のメボンとの関係性にありました。このメボンは神聖かつ重要な場所であり、西バライの中心に位置しています。このメボンの完成とともに西バライの貯水量や水嵩が変化してしまうこ

とが問題となっていました。西バライに役割が集中しすぎているため、これを分散させる方法を考えることが課題のようです。

次に北バライについて。北バライは長年貯水池として使用されていなかったために近年まで木々がたくさん生えている状態でした。しかし、本来の役割どおり貯水池として再利用することが決まり、水を入れた結果、木々は枯れ、枯れ木からリンなどが溶け出しているというのが現状です。水質の面から考えると用途が狭まるため、枯れ木を取り除こうと考える人もいれば、日本でいう侘び寂びのような風情がある景観であるからこのままにすべきだと考える人もいて意見の集約が難しそうでした。実際にこの決定や議論に他国も参加していることは確かであり、なぜ水を入れたのか、木が枯れたのかという経緯を詳しく知らないために怒っている現地住民もいると聞き、誰のための開発かというのはやはりはっきりさせなければならないことであると感じました。この北バライの真ん中にもまたメボンがあり、ここは古代において病院のような場所として考えられていたそうです。古代の人々が作り上げたメボンの配水の仕組みを知らない他国のチームが、修復にあたってパイプを設置したために元の仕組みが破壊されてしまったそうです。発展途上国であるカンボジアにとって他国のサポートは必要ですが、他国はあくまでサポートするのであってリードするのではないということを肝に銘じておくべきなのではないかと考えさせられました。

次にルン・タエク・エコヴィレッジについて(写真2)。ここは、アンコールエリアにおける問題を解消するために作られた村で、今は観光と結びつけようとする動きも活発なところ。問題とは、アンコールエリア内の住居や人口の数を保ちたいものの貯水池である東バライの敷地内にも人々が進出して暮らしている現状のことを指しています。そこでこの新たな村に移住してくれる人々を募っているという



写真2. エコヴィレッジのモデルハウス

わけです。現在この村には、約100世帯の家族が暮らしており、APSARAとしては将来東バライを中心にさらに800世帯の家族に移住してもらうことを計画しているそうです。この村の難点は、シェムリアップ中心街から遠く、開発途中なのもあってマーケットや病院など人々の生活において必要なものが揃っていないというところにあります。しかし、この村に移住してくれた家族には、家を建てるための材料と農業などでの利用を見越して1haの土地が与えられます。この村を今後どのように開発していくかが課題となっています。

また、この村を観光に生かそうという動きもあります。植林体験ができ、自分が植えた木の成長具合をFacebookなどで知ることができるそうです。また、伝統的なクメール建築のモデルハウスでのホームステイプログラムもあり、周囲で育てているさまざまな植物や家畜、魚を使用した料理を味わうこともできるようです。今後、この村が地域住民にとって暮

らしやすい場所となることはもちろん、観光客が自給自足のカンボジアのライフスタイルを快適に体験できる場所へと発展していったらと思います。

最後にクメール・ハビタントについて。伝統的なクメール建築のモデルハウスを訪れ、2階のギャラリーで説明を受けました。伝統的なクメール建築とされているモデルは5種類あり、見た目としては主に屋根の形に変化が表れていますが、それぞれが王の権威が強かったころや中国人の移民が増えたころ、フランスの植民地だったころなど時代背景を反映したものとなっています。クメールハウスは2階建てで、2階は寝るときだけ使用し、1日のほとんどを壁がなく、通気性の良い1階で過ごすそうです。カンボジアの気候に合わせて建築様式にも工夫が施されていて、日本の伝統的な建築と比較するのも面白そうだなと思いました。

その後、古代から今もなお存在している村を訪れ、伝統的な暮らしの様子を視察させてもらいました。村の中心にある神が宿るシンボルにお供え物があったり、甕に雨水を貯めて煮沸して使用したり、石臼で米粉を作ったりと日本の昔の暮らしと似ている部分があるように思えました。この村に立派なパゴダがあったのですが、職員の方の説明だとパゴダで学習できるのは男性だけのようで宗教的な要因もあるかもしれませんが、やはり女性は家を守るという考えがカンボジアにもまだあるようです。この2つの場所での課題は、観光客にいかに関心を持ってもらうかということです。カンボジアというどうしてもアンコール・ワットのイメージが強く、訪れる観光客は主要な遺跡を巡るだけで終わってしまいます。しかし、この遺跡を作り上げた人々の暮らしにまで興味を持ってもらうことがカンボジアの人々にとっては喜ばしいことなのではないでしょうか。

私たちは毎日、午前中にこれらの場所を訪れ、午後から職員の方々とディスカッションをするという行程を繰り返しました(写真3)。しかし、毎日訪れる場所や関わる人が違うからこそ新鮮味もあり、充実した日々を過ごせました。2週間の間にあった休日を満喫したものの、私は職員の方に会えないことに寂しさを感じているほどでした。最初は、話すことも聞くことも自信がなかった英会話ですが、職員の方々は本当に優しくて私も最後まで諦めずに関わろうとする意志が持てました。職員の方のバイクに乗せてもらって移動したり、途中で冷たいジュースやおいしいフルーツをお供に休憩したり、たわいもない話をして笑ったり、そんな些細な時間も大切に、自分がいかにいきいきしていたかということが写真を見返すとよく分かります。実際、インターンシップに参加する1週間前に体調を崩し、完全に回復しないままの渡航で不安もありましたが、カンボジアに着いてから数日で治りました。



写真3. ディスカッションの様子

さて、これまでは業務を中心に述べてきましたが、ここからは私が思うカンボジアの魅力について述べていきたいと思えます。これは2度の訪問を通して感じたことです。まず、食べ物がとてもおいしいです。さまざまな国の料理店があり、通うお店ができるくらい味も文句なしなので困ることはありません。毎日汗だくになりながら業務をこなしていたため、昼食や夕食のときに飲むフルーツシェイクは絶品でした(写真4)。



写真4. 最高の夜を過ごすなら Pub Street

次に、カンボジアの人々はとても温かいです。視察させてもらった村に住む人々や店員、トゥクトゥクの運転手、子供からお年寄りまでみんなが外国人である私たちに笑顔で優しく接してくれました。接客スマイルではなく、心からの笑顔で気さくに対応してくれました。国民性の違いがあるとはいえ、日本では考えられないです。

最後に、この国に来て考えさせられることがたくさんあります。それは日本との比較の上に成り立つことかもしれませんが、やはり自国との違いを実際を感じてから気づくことがあります。例えば、観光地付近では子供が観光客めがけて物を売りに来たり、地雷の影響で身体的不自由を有する人が楽器を演奏してお金を稼いだりする姿をよく見かけました。また、私たちよりも幼い子供がヘルメットをかぶらずにバイクに乗っていたり、靴を履かずに走り回っていたりする姿も見ました。戦争や内戦の影響が少なからず今もあること、変えていくべき現状があることを実感しました。

また、日本に比べてカンボジアは利便性において乏しいけれど、カンボジアの人々の幸福度は高いように思えました。多くの人々が、自分の国や暮らしが好きだと語っていました。私たちはどうでしょうか。交通、インフラ、品物の豊富さなどどれをとってもはるかに充実していますが、日本での暮らしに不平・不満をこぼしている人が多いように思われます。「幸せ」の価値基準は多様であるということを感じました。

最後にインターンシップ全体を振り返ると、本当に充実した時間を過ごすことができたと思います。行動における自由度が高いことも教授やチューターのサポートがあることもこのインターンシップの魅力だと思います。今回は、現地で日本の他大学の学生や孤児院の子どもたちと関わることもできました。さらに現地で働く日本人の方に会う機会があり、私がインタ



写真5. See you again!

ンシップに参加する前にくすぶっていた気持ちを話すと、人生の先輩であるその方から様々なお話を伺うことができました。人生の選択肢は自分が思っているよりも多く、可能性は自分次第で広げられること、学生としての時間がいかに大事であるかということをお教えいただきました。また自分がしたいことは、留学ではなくボランティアやインターンシップなど自分自身が積極的に活動すること、働くことだと気づくことができました。参加したからこそ経験できたこと、出会えた人が多かった分、別れは本当に寂しいものでした。しかし、この2度目の訪問でカンボジアは私にとってさらに特別な国になりました。「ただいま」といえる場所、「おかえり」と言ってくれる人が増えることに大きな喜びを感じています(写真5)。自分を見つめるきっかけと素敵な出会いをくれたこのインターンシップへの感謝の気持ちとともに報告書を締めくくりたいと思います。

## 7) インターンシップに参加して

小松短期大学地域創造学科臨床工学ステージ1年 田中嶺那 (グループ3)

今回、私は2016年8月21日～9月4日の2週間、金沢大学の学生と一緒にカンボジアのアンコール遺跡整備公団へのインターンシップに参加させていただきました。私がこのインターンシップに参加した理由は、元々私は大学に入学したらインターンシップや留学に参加してその国のいろんなことを体験してみたいと思っていたからです。

私はこのインターンシップに参加するまでカンボジアという国に対する印象は、国のイメージとしては諸外国からの募金などによる支援が必要なくらい貧困に苦しんでいる貧困層の人々が多くいるというものでした。そのため、治安があまりよくないイメージがありました。ですが、実際に現地に行ってみると私が想像していた環境とは程遠く、子供達がちゃんと学校に通えていて、物乞いをしている人は少なかったです。それに、現地の気候は思っていたよりも過ごしやすく、昼間はとても暑かったのですが、夜は過ごしやすい暑さでした。ホテルも私が思っていたよりも過ごしやすく、この2週間は自分の部屋のように利用できました。ホテルの近くにはコンビニやショッピングモールやレストランなど色々なお店があり飲み水や食べ物には全く困らなかったです。

私はこのインターンシップが始まる前は不安なことがたくさんありました。私は1年生であり、小松短期大学からは2人しか行けないということから知っている人が少なく、金沢大学から参加する学生は皆年上ということもあり、人間関係に多少の不安感を抱いていました。また、英語を聞くことはまだ出来るのですが会話をすることに苦手意識があり、現地での会話やコミュニケーションにも不安を感じていました。ですが、現地では金沢大学の学生とも仲良くなれましたし、英語も最初は聞き取ることも大変でしたが、向こうで生活しているうちに少しずつ聞き取ることが出来るようになっていきました (写真1)。



写真1. 公団にてディスカッション

カンボジア到着後の初日は午前中には実際に業務で行くことになる場所に行ったり、野生のサルと戯れたりなど、観光もしつつ様々な場所をまわりました。お昼にはフォーを食べ、午後からはアンコール遺跡整備公団 (APSARA 公団) のスタッフの方々との初顔合わせをしました。その時に、自分が所属するグループがどの業務を担当するのかを決めました。インターンシップ参加学生が担当する業務は西バラライ貯水池の環境保全・観光整備事業、北バラライ貯水池の環境保全・観光整備事業、ルン・タ・エクのエコビレッジの整備事業、クマー

ルハビタット事業の4つです。私が所属したグループ3は主に西バライを中心に業務を行いました。今回のインターンシップは例年とは違い、1つの業務を1つのグループのみが担当するのではなく、各グループがすべての業務を経験するというものでした。

私のグループが主に担当した西バライは、カンボジアにあるバライの中で最大規模を誇るものです。その大きさは、横8 km、縦2.2 kmあり、最大で56,000,000 m<sup>3</sup>の水を貯めることができます。また、バライには貯水のほかにも農業地帯に水を供給するなど様々な役割があります。将来的には浄化して飲み水として活用することも期待されているそうです。そして、バライの特徴の1つとして、どのバライにも



写真2. メボンの再現図

も真ん中にはメボンという遺跡建造物があります(写真2)。現在はフランスが修復作業を行っているとのことでした。メボンへはバライの中の水位が下がっていたためバイクで移動しました。道にはぬかるみや凹凸が激しい場所があり、公団の方と少しふざけあいながら向かいました。メボンにつくと公団の方がヒンドゥー教の神話のことについて説明してくださいました。その内容は、世界が海と1つの山しかなかった時代を表しているというお話で、バライが海、メボンが山の象徴であり、人々はこれらに祈りを捧げていたということです。他の業務の時にもヒンドゥー教の神話に関係のあるところにたくさん行きました。

バライを囲む堤防の事についても多くのことを学びました。堤防は現在も昔と変わらず土で作られています。ですから、激しい雨(スコール)や風、それらによっておこるバライ内からの波による浸食が進んでいます。今もなお浸食された部分の修復は行われていますが、機械を使わずに人の手だけで行われているのでとても長い年月がかかります。その修復の方法は、初めに崩れた土壌を取り除き、1層ずつ土壌



写真3. 堤防の修復現場

を固めていき元の形に戻していくというものだそうです(写真3)。堤防は景観の保護と、より持続的な堤防を築くことを目的としてコンクリートを使用していないそうです。元の形に戻したあと、土壌の浸食を防ぐために植林を行うとのことでした。

業務時間外や休日には様々な体験をし、非常に楽しく過ごすことができました。カンボジアに来る前は、ご飯は自分に合うのか、変な人がいないか等々と心配をしていましたが、私たちが滞在していたホテルの近くにはレストランやカフェがあり、味も良くて安いお店

が多くありました(写真4)。夕食は皆でパブ・ストリートやその近辺にあるお店で食べるが多かったです。毎日のようにパブ・ストリートやナイト・マーケットに行っていたのでお気に入りのお店が見つかりました、ネイルやマッサージなどができるお店では周辺を回りすぎて顔見知りになったほどでした。マッサージを受けているときに日本語で「イタイ?キモチイイ?」と聞かれて「痛キモチイイ」と答えると施術師の方がそれを気に入ったのか、それからずっと「イタキモチイイ?」と笑いながら聞かれるようになりました。



写真4. カンボジア料理(ロックラック)

最初は不安だった値切り交渉も、慣れてくるとちょっとしたゲーム感覚で楽しかったです。それに、マーケットやスーパーには新鮮なフルーツがたくさん売っていて日本では滅多に見かけないフルーツがたくさんありました。値段も安く、あまりフルーツが得意でない私でも食べられるものがあり嬉しかったです。フルーツを使ったシェイクがどこのレストランにもあり、昼食や夕食のときにはほとんど飲んでいて、いろいろなお店のシェイクを飲み比べしていました。また、エステやマッサージを高級ホテルで日本よりも格安で受けられるなど、とても充実した生活を送ることができました。基本的に移動にはトゥクトゥクを利用していました。パブ・ストリートやナイト・マーケットを歩いていると、特にパブ・ストリートで「おねえさん。トゥクトゥク。あじのもとー」など日本語で呼び込みをしてくるので、帰るときには大体4~6人で2ドルでホテルまで戻ってもらえるように値切り交渉をしていました。最初はしつこくて少し面倒に感じていましたが、しばらくしたら慣れてしまい日本にもトゥクトゥクがあればいいのに、と思ったりしていました。

最後に、私はこのインターンシップに参加することが出来て本当によかったと思いました。このインターンシップに参加したことによって、カンボジアに対するイメージが大きく変わりました。2週間という短い間でしたが、いろいろなことを学び、体験することができ、観光で訪れたらできないような貴重なことをたくさん経験できました。

インターンシップの実施にご尽力をいただきました APSARA 公団副総裁の Hang Peou 氏、塚脇真二先生、私たちを海外へと送り出してくださった米谷恒洋理事長、長野勇学長、嶋栄一常務理事、山本周事務局長、千葉正事務局長、庶務課西田友紀さん、学務課中村信介さん、担任の中山謙二先生、私たちの教育の充実のためにご寄附をいただいた加納實小松短期大学前理事長、現地で様々な支援をしてくださったチューターの河本麻実さん、若宮野乃花さん、ドライバーの So Pheng さん、業務でお世話になった Phanit さん、そして APSARA 公団の皆さんには本当に感謝をしています。オークン・チュラン(ありがとうございました)!

## 8) 成長を遂げたカンボジアでの2週間

金沢大学人間社会学域国際学類2年 三輪聡子 (グループ4)

私がこのインターンシップを知ったのは今から約一年半前のこと。塚脇教授の授業でカンボジアについて知り、ぜひ参加したいと思い直接教授に話を伺いに行った。それから1年が過ぎ、その思いは消えること無くこの夏念願のインターンシップに参加することができたことを本当に嬉しく思う。帰国してカンボジアで過ごした日々を振り返り、この報告を書き上げながら感じるのは、本当に素晴らしい経験が出来た2週間であったということである。

私がこのインターンシップに興味を持ったのは観光産業に興味があったからである。アンコール遺跡群は世界でも稀な人が住んでいる世界遺産であり、アジアで最も人気の国の1つである。しかし過去には危機遺産になったという歴史もあり、日本を含めた各国の援助によってこの遺産は守られているがまだ修復途中の遺跡も多くあるということを知り実際の現状を確かめてみたいと思った。そしてこの貴重な世界遺産でどんな人たちが働いているのか、どのような問題があるのか、日本はどんな協力をしているのか、自分の目で確かめてみたいと思い参加を決意した。

今回、初めに4つのグループに分かれ、業務に就いた。私の担当は北バライであった。初日に軽く見学した際にバライと呼ばれる貯水池に枯れた木々があるその景観に一目ぼれをして北バライの担当を望んだ(写真1)。最初に訪れた水門は、カンボジアの人々にとって重要である水の管理をする役割を果たしている。山から流れてくる水をここで調節し、農地に水をもたらし、遺跡の土台を強化し、また洪水の場合は町へ大量の水が流れてしまうのを防ぐ働きをしているということを学んだ。2度目の北バライ訪問では、北バライの中心にあるニャックポアンという病院として利用されていた遺跡を訪れた。その周りに私が惹かれた景観がある。しかし、実際そこには大きな問題があった。私が魅力を感じた枯れた木々から出るリンにより水質汚染が進んでいるのである。しかし、私のようにその景観を魅力的に感じる人多く、観光的にはうまくいってしまっているため木の撤去を行うことが難しいのだという。自然を守るか、景観を守るか非常に難しい問題であると感じた。



写真1. 北バライ

先ほど私の担当は北バライであったと述べたが、今年からインターンシップの方針が変わり、すべての担当地区を訪れる機会があった。そこで多くの村を訪れたが、そのコミュニ

ティの強さに驚いた。日本では、過疎化が進み高齢化が進んだ地域ではお年寄りの孤独死が問題になっている。カンボジアの村では開けた建築と共同のマーケットがあることから人々の交流の機会が多くあることが分かる。また、日本で言えば退職者に当たるような年齢の方も働いている光景を見かけた。もし誰かに何かがあってもすぐに気付くことができる環境があること、また生きがいを持って過ごすことが出来る環境があるというのは素晴らしいなと思った。その他に気になったことは、女性が重労働をしているということである。西バライを訪れた時、浸食によって開いた穴を2人組で地道に土を運んで埋めている女性の集団に出会った。体験させてもらったが想像以上の重さであり、1回運ぶのでなかなか体力を使った(写真2)。「男は基本遊んで暮らしたいものだから仕事をしない」ということ聞きとても驚いた。では子供たちの将来の夢は何なのだろうかと疑問を抱き、クメール語で聞き方を教えてもらい何人かの子供たちに聞いてみた。女の子は音楽の先生などと答えてくれたが、男の子は誰も夢を持っていなかった。上手く伝わらなかったのか、または恥ずかしがって答えてくれなかったのかもしれないが、憧れの職業というものが無いという現状を知り、とても悲しく思った。



写真2. 穴埋め作業体験

観光について学びたいと思い参加した私であったが、観光面でも多くの発見があった。中でも印象的であったのは、伝統的なクメール建築について展示してあるクメールハウスを訪れた時である。私はそこで1冊の本を見つけた。それはここを訪れた人が日にち、出身地、名前、コメントを書いているものだった(写真3)。興味を持ち眺めていると、ヨーロッパの国々からの観光客は見つかるが、そこにはアジアの地域からの観光客の名前は無かった。遺跡の中もちろん英語が多く聞こえてくるが、中国語や韓国語、そして日本語がかなり聞こえてくる。しかしこのような場所には誰も訪れていない。私は疑問に思い質問したところ、観光というものがしっかり成り立っているヨーロッパの国々とアジアの国々では観光に対する意識がそもそも違うのだという。ヨーロッパからの観光客の多くはこのようなマイナーな場所も訪れ、その国について学び、ゆっくりと時間を過ごす。一方アジアからの観光客の多くはとりあえず人気のスポットを訪れ写真を撮る。旅行に行くのはみんなが行っているから。確かに言われてみればそうである。日本をはじめとしたアジアの国はツアーが主流であ



写真3. クメールハウスにて

り、時間が決められていてみんなで同じところを訪れるが、他の地域からの観光客は個人個人で観光を楽しんでいる。クメールハウスには模型や詳しい説明書きがあり、また実際の家の雰囲気も感じることができ楽しかった。しかし、もし自分が観光でカンボジアに来ていたら果たしてこのクメールハウスを訪れたのか。帰り際、欧米からの観光客であろう夫婦とすれ違いながら、観光について考えさせられた。

様々な業務を体験したが、業務の中で一番大変だったことと言えばコミュニケーションである。お互い英語が非ネイティブであること、また自分の英語力の低さから、分からない、伝わらないということが何度も起こった。伝わらなくて落ち込むこともあったが、分かるまで何度も聞いたり、伝えるために何度も言い換えたり、時にはジェスチャーを用いたりしてコミュニケーションをとったことは、良い経験であり必ず将来に役に立つと思った。そして、私は滞在中せっかくなのでクメール語を学んだ。塚脇教授や運転手のペンさんに教わり、公団の人と話すときに使ってみたり、子供たちに話しかけてみたりした。クメール語で話しかけた時の現地の人々の驚き嬉しそうな顔を見ると、現地の言葉を少しでも話せると相手のこちらに対しての印象が変わってくると感じた。

最終日の面接では、ある提案を公団に伝えた。それは、アンコール遺跡群で御朱印集めのようなことを行ってみたらどうかというものである。日本には寺社を訪れた際、御朱印というそのお寺を訪れた証をいただくことが出来る。私も数年前に始め、私だけの御朱印帳を作る魅力にはまり、コツコツと集めることが趣味となった。アンコール遺跡群はとても広く、遠くの遺産にはあまり人が訪れないという問題があるが、この御朱印集めを行えばその問題を解決できるのではないかと思った。しかし、結果は難しいということだった。もし御朱印集めを行ったら、その御朱印を集めることに夢中になり遺跡の歴史や建築についてはそっちのけになってしまう観光客が出る可能性があることや、誰が行うのかといったさまざまな問題が出てきた。何かを提案するときはそれによって引き起こされる問題など深く考え、その対処法もしっかりと考えたうえで提案するべきであるということ学んだ。そして様々な観点から考える広い視野を持つことの大切さを知り、失敗ではあったが自分の中で良い経験となった。

日々の生活の中で思い出深いのはカンボジアの食事である。安くておいしい食事はカンボジアの大きな魅力の一つである。私の中で外れだと思った食事は一つもなかった。塚脇教授が教えてくださったのは、現地の人々が食べている食べ物は安全だということ。観光客向けに作られた屋台では現地の人々は食事をしない。なぜなら不衛生であるからである。このことは今後また海外を訪れる際に自分の体を守るために重要であるので忘れないようにしようと思った。そ



写真4. 初めて食べた虫

して現地での食事で最も印象的であったのは、虫を食べたことである。虫を食べるのは私にとって初めての経験であり、初めは虫なんて気持ち悪いと思っていたが、これも経験だと思い挑戦してみた。その味はなんとエビに似たものであった。つまり美味しいのである。その形に若干の抵抗はあるが何だかんだ5匹は食べてしまった。何事も試してみなければ分からなく、見た目や固定概念で判断するべきではないと感じた。この経験を帰国後友人や家族に伝えるとやはり気持ち悪がられ引かれることもあったが、現地の人の本当の食事について知ることができた良い経験であったと思う。もちろん、カンボジアの食事が全て虫のようなゲテモノであるわけではないので安心してほしい。カンボジアの家庭料理である Amok は見た目も美しく本当に美味しかった。また物価の安さも大きな魅力である。マーケットでは交渉次第でかなり安くすることも出来る。私が何度言っても安くできなかったものを塚脇教授が一発で値切れたり、同じものを友達が安く買っていたりして悔しかったが、後半にはうまく値切れるようになり、初め 12 ドルだったものを 4 ドルで買えた時には自分の成長を感じることができ嬉しかった。初めは怖かったトゥクトゥクも 2 週目からはスムーズに乗れるようになり、しつこい勧誘も上手くあしらえるようになった。

カンボジアと聞いて何を思い浮かべるだろうか。私はカンボジアを訪れる前は発展途上国であるというイメージでしかなかった。しかし、実際訪れてみてその考えは変わった。確かに町から離れた村には電気が通ってなかった。世界でも清潔な国として知られている日本で育った私には不衛生だと感じる場所や食べ物もあった。しかし、人々は目が合うと必ず微笑んでくれ、子供たちは元気に外を走り回っていて人懐っこく近づいてくる。オクンというクメール語はありがとうという意味であり、彼らはこの言葉を言うときに手を合わせ、感謝の意を心から表してくれる。確かにまだ発展途上の国ではあるが、人々の心の優しさ・温かさはどの国よりも発展していると感じた。

私事ではあるが、このインターンシップ中に私は 20 歳の誕生日を迎えた。人生で初めて口にしたアルコールは Angkor Beer。大人の味であった。異国の地で大人への仲間入りを果たし、このインターンシップを通して出会った素敵な仲間たちに祝ってもらったこの誕生日を私は決して忘れないだろう。この 2 週間は本当に刺激的で報告書に書ききれないほどに多くの経験ができ、年齢だけでなく、精神的にも自分を大いに成長させてくれたと思う。この素晴らしい経験をさせてくださったアプサラ公団の方々、運転手のペンさん、塚脇教授をはじめとする金沢大学の先生方、たくさんサポートしてくださった木村先生とチューターの麻実さんに野乃花さん、関わった全ての方々に心より感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。



写真 5. 皆に祝ってもらった誕生日

## 9) アンコールインターンシップに参加して

金沢大学人間社会学域人文学類 3年 近藤友理奈 (グループ 4)

この夏、8月21日から9月3日までの2週間、カンボジアのシェムリアップにてアンコール遺跡公団(通称アプサラ公団)でのインターンシップに参加してきた。私がこのインターンシップに参加しようと思った理由は2つある。ひとつ目は、アンコール遺跡群への興味である。もともと世界の文化やその歴史に興味があり、今は大学で文化遺産学や文化人類学を専門に勉強している。アンコール遺跡群は文化遺産の中に人々が生活している稀有な遺跡であるということで、ぜひ一度訪れてみたいと思っていた場所のひとつであり、このインターンシップでなら、ただの観光ではなくそのより深いところまで学んでくることができると思った。2つ目は、英語を主に使用するということである。現地の方々の母国語はクメール語、私たちは日本語であるが、このインターンシップではコミュニケーションツールとして英語を用いる。お互いの母国語でない英語を共通語として会話をするというのは、今世界中で行われていることであり、将来必ず役に立つものだと思う。ただの語学研修ではない言語体験をしてみたかった。もう3年生ということもあり、海外でのインターンシップにも興味をもっていたので、このプログラムは私の興味にぴったりとはまるものであった。これらの志望動機を目的と変換して考えると、今回のインターンシップではどちらの目的も達成することができたように思う。

アンコール遺跡群を知りたいという目的は、業務に関連して大いに達成することができた。業務では、今年は例年と異なり、各グループがひとつの場所だけを担当して当たるのではなく、西バライ、北バライ、ルンタエク・エコビレッジ、クメール建築の4つのテーマを全員が視察し学習するという形で行った。ひとつの場所に集中して取り組むのも深く学べていいと思うが、すべての場所に行くことができたのは、個人的にはとても嬉しかった。初めての景色を見て、新しい知識を得る、とても貴重な経験をたくさんさせてもらった(写真1)。



写真1. 通勤はバイクで

私が特に興味をもったのは、それらと観光の関わりである(写真2)。最初に述べたように、アンコール遺跡はその中で人々が生活している遺跡である。人々の生活が観光客に害されるということはあってはいけないことだと思うし、その兼ね合いは難しいところだと思うが、アンコール地域にはまだ活用できる可能性をもった観光資源が多くあるのではないかと、周辺を視察させてもらって感じる機会が多くあった。西バライや北バライは人工の貯

水池で、人々の生活や農業、さらに遺跡の維持にも重要な役割を果たしており、アンコール地域にはなくてはならないものである。しかしこのようなことはガイドブックに書いてあるわけもなく、私も現地に行き話を聞いて初めて知ることばかりであった。

観光地を訪れる人の目的やニーズはさまざまだと思うが、このような地域の暮らしについて学んでから訪れると、遺跡もまた違って見え、より一層面白くなるのではないかと思う。これはルンタエク・エコビレッジについてもいえることで、観光客が集まる中心地には西洋風のホテルやレストランが立ち並んでいるが、少し郊外に足をのびしてルンタエク・エコビレッジに赴けば、アンコール地域の伝統的な暮らしを見ることができる。私がガイドブックを書くなら絶対にこれを載せるのに！とさまざまな場所で何度も思った。もちろん、ガイドブックに載っている

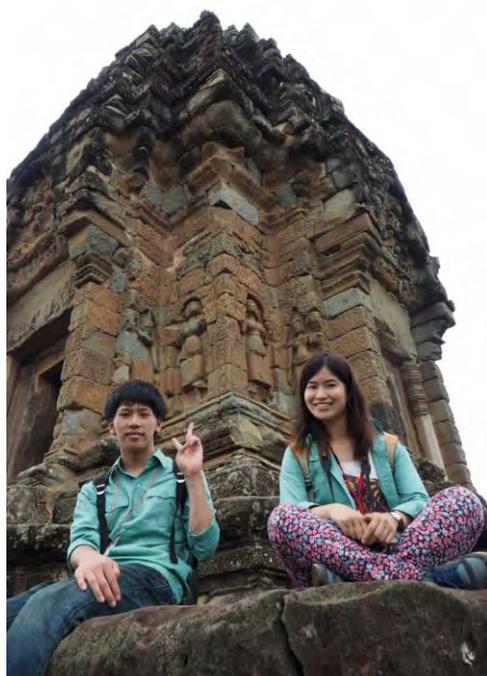


写真 2. 業務で訪れた遺跡にて

遺跡を見て写真を撮るといっても素敵な楽しみ方だと思うが、その地域について学び、実際に体験するというのも、楽しみ方のひとつとしていいのではないかと思う。そんな楽しみ方ができる場所が、アンコール地域にはたくさんあると感じた。

2つ目の英語については、もちろん英語力そのものも向上が図れたと思うが、何よりコミュニケーション力が鍛えられた。やはりお互いに母国語ではない言語で会話するのは難しく、うまく意思の疎通ができないときもあったのだが、公団の方々は本当に親切で、私たちが理解できるまで根気強く説明してくれた。私も自分の意見を伝えるときにうまく伝わらないことが多くあったので、別の言い回しに変えてみたり、身振り手振りをういてみたり、伝えるために別の手段を考えるという機会が何度もあった。このようなことを繰り返しながらの2週間だったので、相手の言っていることを理解しようとする、自分の意見を正しく伝えようとする、その力がインターンシップに行く前よりもかなり向上したように感じている。これは自分にとって大きな収穫だったし、将来につなげていきたいと思う。また、一緒に行ったメンバーたちからもとても良い刺激を受けた。参加したメンバーのほとんどが国際学類だったので、私よりも英語力の高い子たちばかりで、彼女たちが公団の方とスムーズに英語で会話しているのを見ると、自分の英語の拙さに悔しい思いをすることが何度もあった。このインターンシップを機に、自分の英語を見直しより一層学習に励んでいきたいと思うようになった。

このように、2週間という短い期間ではあったが、非常に有意義な時間を過ごすことがで

きた。業務外の時間も、アンコール遺跡群の見学に行ったり、クメール料理をはじめとする日本では出会えないような各国の料理を食べたり、公団の方々とお互いの言語を教え合ったり、子どもたちと遊んだり、毎晩マーケットに出かけたり、マッサージ屋の店員さんと仲良くなったり、と十二分に異文化体験をすることができた。子供たちが歌ってくれた日本語の歌の数々は忘れられない。カンボジアでの経験は、日本にはできないものばかりであったし、すべての瞬間が忘れられない時間となった（写真3, 4, 5）。

ひとつ後悔をいえば、宗教と歴史についてもっと勉強してから行くべきだったと感じている。大学でもそれらについての勉強はしているのだが、全くの知識不足だった。ヒンドゥー教の神話や、カンボジアの宗教に関する歴史などをもっと知っていれば、公団の方の話をもっとわかっただろうし、遺跡見学も楽しめただろうと思う。悔しくて今改めて勉強し直しているところである。来年以降このインターンシップに参加したいと考えている人は、ぜひ勉強してから行くことをおすすめしたい。

最後に心残りを書いてしまったが、このインターンシップではまたとない貴重な経験をたくさんさせてもらい、参加して本当に良かったと思っている。今回出会えた方々とのつながりをこれからも大切にして、今回得たものを、今後何らかの形で生かしていきたい。そして、もっともっと成長して、必ずまた、カンボジアを訪れようと思う。



写真3. 村で出会った女の子



写真4. 公団の方々との食事会



写真5. 休日のアンコールワット観光

## 10) アプサラ公団でのインターンシップを終えて

小松短期大学地域創造学科臨床工学ステージ1年 森瀬陽人 (グループ4)

今回、私は金沢大学主催のアンコール遺跡群でのインターンシップに、8月21日から9月4日までの14日間参加しました。私は小松短期大学に在籍している間に、今までに経験したことのないことに挑戦したいと思っていました。このインターンシップへの参加を決意した1番の理由は、昨年このプログラムに参加した従兄の牧田啓成に強く勧められ、彼の話を聞いてカンボジアという国に興味を持ったからです。また、世界で最も観光客を魅了するアンコールワットを訪れる良い機会であると同時に、アンコール遺跡整備公団 (APSARA 公団) でのプログラムを通して、観光客としてアンコール遺跡を訪れるのとは異なる様々な貴重な体験ができると思ったからです。

出国前、私は色々と不安な点がありました。1つ目は生活環境です。私は最初、カンボジアは途上国だからという理由だけで、治安や衛生面などの生活環境がよくないのではないかと考えていました。また、近年世界でテロ事件が多発していることから、安全面については家族からも心配されました。2つ目はコミュニケーションについてです。公団の方々とのコミュニケーションでは基本的に英語しか使われないのですが、私はもともと英語に苦手意識があったのでとても不安でした。また、今回一緒に参加していた人たちが全員女性で、金沢大学の学生の皆さんは年上ということもあり、うまくやっていけるのか心配でした。他にも食べ物や飲み物は体に合うのかなど渡航前の不安は沢山ありました。

現地での生活全般に不安を抱えた状態で日本を出発しましたが、現地での2週間は想像を超える素晴らしいものでした。最初は自動車やバイク同士の距離の近さや危険なバイクの3人乗りなど、見慣れない環境に驚きましたが、2~3日ほどで慣れました。治安も安定しており、衛生面についても生水や露店などの食事などに気を付けていれば問題なく過ごすことができました。泊まったホテルの周りにはレストランやカフェ、コンビニ、大きくて品揃えの良いショッピングモールなどが充実しており日常の生活には全く不自由しませんでした。食事は私の想像以上に日本人の口に合うものが多く、特にバイチャー (チャーハン)、ロックラック、アモック、フォー、タイスキは絶品で、期間中何回も食べてしまいました。また、フルーツもとてもおいしく、それを使ったシェイクやフレッシュジュースはほぼ毎日のように飲んでいました。



写真1. マーケットの様子

現地での業務時間以外の交通手段には、トゥクトゥクと呼ばれる2ドルぐらいで乗るこ

とのできるタクシーのようなものがありました。業務のない休みの日などにはこれを使い、街の方にあるマーケットに買い物へ行ったりしました。マーケットでは、店員の人が私たちの顔を見ただけで日本人観光客だと判断し、上手な日本語で話しかけてきたのでとても驚きました（写真1）。

初日は公団本部で簡単な自己紹介をした後、ルン・タ・エク・エコビレッジ、西バライ、北バライ、クメールハビタットの4つのグループの説明を受けました。例年通りだとこれらの4つのテーマのうち、それぞれのグループが1つずつ担当するのですが、今年は全グループが一通りすべてのテーマを1度は担当しました。主な業務内容は、午前中は業務地にて説明を受け、午後からは公団本部に戻りディスカッションをするという流れでした。移動手段は主にバイクで、公団の方たちが使用しているバイクの後ろに乗せて頂いて移動しました（写真2）。



写真2. バイクでの移動

私のグループ4が一番関わった業務は北バライでした（写真3）。「バライ」とは現地の言葉で「貯める」という意味があり、アンコール王朝時代に作られた人工の貯水池です。北バライは、東西3.6 km、南北930 mと現在機能している貯水池では西バライに次ぐ大きさで、アンコール・トムの北東に位置しています。北バライは12世紀に作られたものですが、500年ほど前に水がなくなり、そのまま放置されていたそうです。水は8年前に再湛水されましたが、放置されていた時に発生した森林を残したまま水を入れたため、現在は木が枯れてしまい水質汚濁の原因となっていて、APSARA公団によって木の伐採が進められています。



写真3. 北バライの様子

午後からのディスカッションでは自分自身の英語力不足によりとても苦労しました。普段の生活で英語を使う機会があまりないので、話すことはもちろん、聞き取るだけでもとても大変でした。同じグループの方に助けてもらうことも度々あり、本当に申し訳なく思いました。

業務のない休日にも、遺跡の周りを象に乗ってまわったり、トンレサップ湖で船に乗り水上生活者の生活を見たり、ナイトマーケットなどでは値切り交渉をしたりなど日本ではす

ることができない経験がたくさんできました。特にあの有名なアンコールワットを間近で見ることができ、カンボジアの歴史や神話を詳しく聞くことができたことは私にとってかけがえのない経験となりました（写真4）。また、業務を通して、今まで教わる機会が少なかった建築や農業について詳しく知ることができたことも大変勉強になりました。



写真4. アンコールワット

また、今年のインターンシップでは小松短期大学と APSARA 公団との間で「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書を締結しました。調印式には小松短期大学の学長や関係者と同席させていただきました。この貴重な瞬間に立ち会えたことはとても感動的でうれしい体験でした。

今回のカンボジアでの 2 週間のインターンシップで自分に足りなかった部分は英語力だと思いました。相手の言っていることが理解できない、理解できても自分の言いたい適切な言葉が出てこなくて会話が續かないなど、とても悔しい思いをしました。今後は英語の勉強に力を入れたいと思います。また、英語ができなかったことと同時に積極的に話しかけることの大切さにも気付くことができました。最初は英語への苦手意識もあって積極的に話しかけることができなかつたのですが、自分から単語を並べ、ジェスチャーを交えて話しかけることで会話ができたときは、とてもうれしく自信を持つことができました。同時に、英語を上手に話しかけることにこだわるのではなく、身振り手振りで相手に伝えようという気持ちが大変だと感じました。これからもこの経験を活かしてたくさんの方に積極的に挑戦し、今後の自信につなげていきたいと思っています。

最後に、今回、忙しい中私たちを受け入れてくださった APSARA 公団副総裁 Hang Peou さん、2 週間、時間を割いてご指導してくださった APSARA 公団の皆様、このような貴重な機会を与えてくださった小松短期大学の米谷恒洋理事長、長野勇学長、嶋栄一常務理事、山本周事務局長、千葉正事務局長、庶務課西田友紀さん、学務課中村信介さん、送り出してくださいました担任の中山謙二先生、私たちの教育のために貴重なご寄附をいただきました加納實前小松短期大学理事長、終始安全で楽しいインターンシップのためにご尽力いただいた塚脇真二先生をはじめ木村誠先生、運転手の So Pheng さん、チューターの河本麻実さん、若宮野乃花さん、一緒に参加した皆さん、金銭的に支援してくださった家族に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 5. チューターの報告



## 1) 3度目のカンボジア

金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻 1年 河本麻実

8月21日から9月3日までの2週間、カンボジアのアンコール遺跡整備公団（APSARA 公団）でのインターンシップにチューターとして参加しました。7回目となる今回のインターンシップでしたが、私は5回目の年にインターン生として初めて参加しました。それから縁あって、チューターとして昨年に引き続き参加を果たすことができました。本当に幸運だったと思います。

チューターとしての最も重要な仕事はインターン生10名と共に金沢とシェムリアップ間を安全に移動することでした。今年のインターン生は国際学類の3年生が1名、2年生が5名と人文学類の3年生と2年生が1名ずつ、小松短期大学の1年生が2名という構成で、大学院1年の私からするととてもフレッシュなメンバーでした。そしてチューターは昨年参加した若宮さんとの2人体制でした（写真1）。今年は女子が大半を締め、とても賑やかな雰囲気です。いつも元気をもらっていました。



写真1. チューターのふたり

シェムリアップ空港に降り立つと、蒸し暑い空気に触れてまたカンボジアに戻ってこれたことを実感し、懐かしく、嬉しく思いました。市内は主に毎年お世話になっているドライバーのペンさんの車で移動していましたが、ペンさんとの再会もカンボジアに戻ってこれた喜びのひとつです。

業務については、例年と同じで午前中は公団のスタッフにホテルまでバイクで迎えに来ていただき、水門やバライなどの現場に出向きました。そして昼は一度ホテルに戻り昼食をとった後は、公団オフィスでグループごとに水管理システムや観光開発についてのディスカッションを行いました。今年も4グループに分けられ、担当スタッフがついていましたが、全体を見ることができるようということで、1週目は担当に関係なく担当外の現場にも訪れて説明を受けることができました。

有名なアンコール・ワットやアンコール・トムをはじめ、天空の城ラピュタのモデルとなったと言われているタ・プローム遺跡など様々な遺跡を訪れる機会がありました。業務の中心となるバライでは、歴史や神話だけでなく水のシステムも詳しく教わりました。インターンとして参加した時から何度も説明を聞きましたが、水を管理するAPSARAが行う仕事は遺跡地域で暮らす大勢の人々の生活を支える上でいかに重要であるかを実感しました。

今年の業務で最も印象的だったのは、私がインターンで担当したルン・タ・エク・エコピ

レッジが変化していたことです。観光地としての開発がより進められており、村全体に生活感が出てきて活気に溢れている様子を感じられました。実際、去年は空き家が多いように感じましたが、今年には106件中103世帯の家族が住んでいると伺いました（写真2）。小学校にも訪れましたが、子どもたちの元気いっばいな声が外まで聞こえてきてこれからの村の発展が楽しみになりました。ルン・タ・エクを訪れた日はシンガポールの旅行会社が運営しているエコハウスのレストランで村のスタッフの方々と共にお昼ごはんをいただきました。魚とゆで卵が特に美味しくて、命を頂いていることを実感しました。

業務が終わると帰り道はスクールに遭うことが多かったです。そのため天気の良いタイミングが合わず、夕陽をみんなで見に行くことができなかったことが心残りです。しかし、孤児院に行ったり、スーパーで買い物をしたり、日本とは全く異なる生活で業務とはまた異なった刺激がありました。

私は行きたいところ、したいことリストを作っており、チェックリストを消化していくのがアフターファイブの楽しみのひとつでした（写真3）。

業務のない土日は学生の要望を聞き、リフレッシュして過ごしました。象に乗ったり、スパに出掛けたり、プールで遊んだり、遺跡を訪れたり、ショッピングをしたり、みんな思い思いに過ごし、働く社会人のように土日の有り難みを実感したのではないかと思います。

今年も東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖を訪れました。ボートに乗って遊覧しましたが、水の上に家から学校、お店まで揃っており、観光客に物を売ってくる子供がいて、その風景は毎年同じで懐かしい気持ちになりました。ボートの上に乗って人々の生活を覗いてみると、水の上でたくましく生きる人たち、ボートに乗って学校に通う子供たちがこの国にはいるということを2年前に初めて来るまで知らな



写真2. ルン・タ・エクで暮らす人々



写真3. 業務後はシェイクを飲みカフェへ



写真4. 人々が生活しているトンレサップ湖

かったと思い出し、日本から飛び出して世界を見ることは自分の変化に繋がると改めて実感しました（写真4）。

今回のインターンシップでは、途中体調を崩した学生がいましたが、大きなアクシデントはなく、健康に安全に無事終えることができました。食欲に学び、遊び、食べる学生たちの姿を見て一緒に過ごしていると、私自身も体調を崩すこと無く元気に乗り切ることができました。また、公団のスタッフの私たちを歓迎してくれ、様々なことを教えてくれて、時には冗談を言い合いながら楽しませてくれました。その姿は2年前から変わらず、自分たちとは異なる価値観や文化、それを持つ人を積極的に受け入れる姿勢を学びました。カンボジアでは何度も人のあたたかさに触れ、力強さを感じました。これは日本でメディアを通してカンボジアについて見聞きするだけでは絶対に経験できません。改めて、2年前勇気を出してチャレンジして良かったと心から思いました（写真5）。

昨年もチューターを務めました。昨年とはまた異なる学びがあったと感じています。このような貴重な機会をくださった塚脇先生をはじめ、インターンシップの実施に当たりお世話になった先生方、現地で出会った皆様に心から感謝致します。



写真5. カンボジアに人数制限はありません

## 2) 2 度目のシェムリアップとアンコール世界遺産

金沢大学人間社会学域国際学類 3 年 若宮野乃花

出発まで、昨年たくさんの貴重な体験をさせて頂いたこのインターンシップに、今年はチューターとして参加できることをとても楽しみにしていました。実は、10 月に留学を控えていたため、チューター募集のメールを何度も読み返しながら応募するか迷っていたのですが、きっとなんとかなる！と考えがちな楽観的性格が影響してか、思い切った決断をしてみました。留学に際してアドバイスを頂いていた先生や、学類長の加藤先生には大変ご心配をおかけしたことと思います。それでも先生方は私の背中を押して下さり、あの時自分のしたいように決断できてよかったと心から思っています。

さて、昨年と向かう国や業務場所は同じですが、現地ですることは全く違います。チューターとして任された仕事は、行き帰りの引率や参加者の体調管理、食事の手配、ホテルに戻った後のトラブルの対処など、インターンシップが円滑に進むように細かい調整をするものが多かったです。自分がインターン生だった時はチューターのお二人に毎日お世話になり、仕事をしている場面を何度も見ていたのですが、いざチューターになってみると、仕事のタイミングや適切な指示を出すことが難しく、2 回目のチューターである麻実さんに頼ってしまうことが多くなりがちでした。そこで、私もインターン生が頼りにできるチューターになるにはどうしたらよいかと自分なりに目標を決め「曖昧な返事はしない、自信がなさそうにしない、事前に必要な情報を集める、メモは誰が見てもわかりやすいように」、行動に移せるように心がけました。目標を実践できていたか、インターン生に頼ってもらえていたかは自分の感覚でしか分かりませんが、目標を決めることで少しずつ業務をスムーズにこなせるようになった気がします。

今年のインターンシップ生は 10 人で、8 人が金沢大学、2 人が小松短期大学の学生でした。男女比は 1 : 9 (チューターも合わせると 1 : 11)、金沢大学の生徒 8 人中 5 人が国際学類の 2 年生ということもあり、最初は少数派が多数派に溶け込めるのか心配していましたが、すぐに打ち解け、協力して業務に取り組むインターンシップ生を見て、杞憂だったと安心しました。業務後の夕食や自由時間も、楽しそうに談笑していたり一緒にプールに出かけたりと、仲間との時間を楽しんでいるように感じました。

業務は朝の 8 時 30 分頃から始まり、グループごとに公団職員の方と現場に向かいます。午前中は現場の様子を見ながら職員の方に基礎知識を教えて頂いたり、疑問に答えて頂いたりして公団の業務につい



写真 1. 大きな水門の近くで

て学びます。午後はディスカッションを通して、午前中に学んだことについて問題点について話し合い、新しいアイデアや改善策を提案することが求められていました。去年は業務を行う場所が固定されており、一つの業務地について学んでいましたが、今年は全員が、用意されている4つの場所すべてを回る形式でした（写真1）。具体的には、貯水池である西バライや北バライ、新しく作られた村であるルンタエク、アンコール地区に住む人々の暮らしや文化、という4つの場所とテーマに焦点が当てられていました。それぞれ全く別の業務地のように思えますが、観光や現地の人々の暮らしという点で繋がっていると説明を受けました。アプサラ公団はシェムリアップという地域の管理をしている、いわゆる市役所のような存在であるため、重要な仕事を手広く請け負っているのだなと実感しました。

昨年とスケジュールの形式が違うため、個人的には初めて行く場所や新しい発見が多く、毎日がとても充実していました。特に、ルンタエクという遺跡内の余剰人口の対処法として生まれた村は、昨年訪れることのできなかつた場所だったため興味深い点が多くありました。前回のインターンシップ中、主にルンタエクで業務をしていたメンバーから「ルンタエクに住むと土地や家が貰えるなどメリットも多いが、市街地から離れた郊外であり、寺院や市場がないため村を離れる人が後を絶たない」という問題があることを教えてもらったこともあり、あまり人気が多くなく静かな街をイメージしていたのですが、実際には状況が変化しているように感じました。

今のルンタエクでは100世帯ほどの家族が暮らしており、用意されている住居はほとんど埋まっている状態でした。村の近隣には住民たちに割り当てられた田畑が広がっており、村の中には鶏小屋があり、中央の池では魚が獲れ、住民が暮らしていくために必要なものが村の中ですべて揃うことを目指しているそうです。更に今までは無かった寺院（パゴダ）が建設中であり、今後さらに住民にとって住みやすい村になるようにと努力が重ねられています。その一方で、観光客の誘致にも力を入れているそうで、外国人観光客用の高床式ゲストハウスや、ルンタエクでつくられた食材を使った食堂などの施設もありました。

アンコールワット等の遺跡やシェムリアップ市の中心部へのアクセスはあまりよくありませんが、流星群がとても綺麗に見えるとのことで、一通りの観光を終えた観光客がカンボジアでの暮らしをゲストハウスで体験し、夜は流星群を見学する、といった使い方が望ましいのかなと感じました。もちろん、電気は村の中に点在する小さなソーラーパネルの電力のみであったり、電話線が通っていません。観光地化と地域住民の暮らしを守ることの両立など改善点も残っていますが、これからルンタエクはどのように変わっていくのか、どのように方向を定めていくのか、今後の動向が非常に気になります（写真2）。



写真2. ルンタエクの基礎知識を教わる

また、今回のインターンシップの終わりには、小松短期大学とアプサラ公団との協定に関する調停式があり、二国の公的な組織間での国際的な式典に立ち会う貴重な体験ができました。式は小松短期大学の紹介に続いてアプサラ公団総裁と小松短期大学学長が挨拶を交わし、調印後握手を交わすという流れで行われました。私は式典の間撮影に回っていたのですが、他にもカメラを構えた方がたくさんいたので、ちょっとした記者の気分を味わうことができました。代表の二人が握手を交わす瞬間を上手く撮影することはとても難しく、納得のいく一枚がなかなか撮れなかったことをよく覚えています。

さらに、鹿児島大学の研究チームに同行し、西バライでの淡水魚採集に参加させていただきました。地元の漁師に網で魚を獲ってもらい、その魚を水を入れた容器に入れ、後から魚の種類ごとに分類する、という作業を行い、分類した魚は鹿児島大学の皆さんが持ち帰り標本にすると話していました。ダツやグラミーの仲間、身体が透けている魚などの普段あまり目にすることがない魚も多く採集され、みんな楽しみながら作業していました（写真3）。



写真3. 西バライで淡水魚の採集

休日や業務後の自由時間はナイトマーケットで買い物を楽しんだり、トンレサップ湖という大きな湖をクルージングしたり、ゾウに乗ったり遺跡をめぐったりと各々がしたいことを計画して楽しんでいました。業務期間中に二人のインターンシップ生が誕生日を迎え、先生方が用意してくださったケーキでお祝いした夜もありました。思い切り楽しむ半面、全員が最低限身の安全に気をつけていたおかげか、最終日まで事件や事故に巻き込まれたり、病院に駆け込んだりすることもなく、無事に金沢へ帰ってくることが出来ました。

インターンシップを終えて、シェムリアップは本当に魅力的な観光地であると改めて感じました。そして、魅力的な観光地としての側面を維持しつつ、地域住民の生活と観光の両立を図っているアプサラ公団の仕事は非常に重要であり、同時にとても大変な仕事であることも実感しました。インターンシップ生の皆さんともう一人のチューターである麻実さん、鹿児島大学や埼玉大学の皆さん、事務対応をしていただいた辻谷さん、国際学類長である加藤先生、引率していただいた塚脇先生と木村先生、そしてアプサラ公団の皆さん、本当にありがとうございました。来年のアンコール・インターンシップも、実りの多いものになることを願っています。

## 6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告



## 1) 埼玉大学の海外フィールド実習

埼玉大学教育学部・准教授 荒木祐二

金沢大学の海外インターンシップに参加するのは今回で 5 回目となる。この度は、埼玉大学教育学部 3 年生の岩崎翼に加えて、農業の専門家であり埼玉大学教育学部技能補佐員を務める浅子孝一氏にも同行いただいた。以下に、本年度の活動を振り返る。

筆者らが合流したのはインターンシップ業務の終盤にあたる 8 月 30 日となった。8 月にはお盆明けに 2 つの学会を抱え、今回の日程調整は難航した。金沢大学と小松短期大学の学生たちはすでに慣れた様子で公団職員たちとやりとりをし、余裕すら感じさせる雰囲気の中で業務にあたっていた。チューターの活躍は本年度も目を見張るものがあり、参加学生の安全確保に欠かせなかったと思う。チューターを務め



写真 1. 西バライで採取した魚を観察する学生たち

た河本麻実さんと若宮野乃花さんのふたりは落ち着いた雰囲気の中で穏やかにインターンシップの学生たちに接し、その不安を取り除いているようにみえた（写真 1）。ふたりの和やかな対応により、学生たちの心理的負担は大いに和らいだことだろう。また、チューターとしてかかわったことで、支援する立場からインターンシップを客観的に捉えることができ、参加学生たちに加えて公団職員の身の上を案じるなど考える視点にも変化がみられたようであった。

このインターンシップの傍ら、埼玉大学チームは、トンレサップ湖やアンコール遺跡内の森林・水圏環境におけるフィールド実習（写真 2）、およびルンタエク村や遺跡内のプラダック村における小中学校や住民生活の視察を実施した（写真 3）。トンレサップ湖の視察には鹿児島大学グループも同行し、この場所を研究フィールドとする筆者から植生や樹木の生態について説明させていただいた。

トンレサップ湖は、雨期と乾期で景観が劇的に変化する世界的にも稀な自然環境であり、そのメカニズムにかかわる話を興味深く聞いていただけたと思う。

参加した学生にとっては、プラダック村やルンタエク村での住居訪問が強く印象に残っているようである。突然の訪問にもかかわらず、躊躇わず家に招いてくださる



写真 2. 遺跡内にてココナツの食味

カンボジアの方々の大らかさや、ものが十分になくても学校が遠くても幸せそうに暮らす姿を目の当たりにして、自分たちの生活を根本から見直していた。また、農業を専門とする浅子氏にはルンタエク村の農地について、「圃場は保水性と排水性を改善するために土をもっと高く盛る必要があることや、村内に水路をひいて灌水の効率を上げること、土壌改良のために植物由来の堆肥を投入した方がよい」といった助言をいただいた。こうした有益な意見を参考にさせていただきながら、現地環境に適した方策を見出していきたい。

本フィールド実習には筆者が所属する教育学部の学生が参加することから、教育施設の見学を重視したいところであるが、8月から9月がカンボジアの学校の長期休暇にあたり、多くの子どもたちと接することができない課題を抱えている。そうはいっても開催時期の変更は難しいことから、民家訪問の際に地域住民に対して教育事情に関するヒアリングを意識的に行うなどして、学校訪問の代替としたいと考えている。森林や水圏環境での実習についても、説明にどうしても固有名詞が多く入ってしまうことから、参加者がよりよく理解できるように解説の補足資料を準備したり、必要に応じて渡航前に予習したりしてもらおうような工夫を試みたい。加えて、各所の案内では筆者がほとんどの場面で通訳をこなしてしまう点も反省しておきたい。金沢大学のインターンシ



写真3. プラダック村でのホームガーデン調査

ップ参加者たちのように、自分の気持ちを自分の言葉で話してカンボジアの人たちと心を通わせる経験をしてほしいと願っている。そのための手立てを考えていきたい。

インターンシップは活動全体が醸成され、公団職員たちもメンバーの入れ替わりがありつつも、毎年の恒例行事として参加学生たちを快く向かい受け入れてくれている。今後も、学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただき、同時期に埼玉大学のフィールド実習を継続していけることを願っている。末筆ながら、この度の渡航であらゆる面でお世話になった塚脇氏をはじめ、今回はお会いできなかったが多くの支援をいただいた公団副総裁の Peou 氏、そして公団職員たち、運転手兼通訳として助力いただいた Pheng 氏と Sim 氏、その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

## 2) 海外フィールド実習を終えて

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程3年 岩崎 <sup>たすく</sup>翼

今回、私は荒木先生の紹介を受けてカンボジア海外フィールド実習に参加させていただいた。初めての海外渡航ということで分からないことだらけの中での実習となり、終始緊張をしながらの実習となったが得るものがとても多く、日本にいたのでは経験することの出来ない貴重な経験をすることが出来た。私は主に遺跡とその周囲の自然の見学、そして現地の人へのインタビューを行った。

まず私はカンボジアに存在している多くの遺跡に圧倒された。カンボジアにはアンコールワットを始めとした様々な寺院が存在しており、そのほとんどが巨大で且つ緻密な彫刻がなされていた。遙か昔、それらの寺院が出来た頃には重機械などが存在しているわけもなく、昔の人々は人力でそれらを作り上げたということになる。石を積み上げるだけで建物を安定させ技術の素晴らしさもさることながら、ひとつの大きさが人の身体近くある巨石を高く積み上げたという事実に私はただただ驚愕するばかりだった(写真1)。またその石や壁面に彫られている彫刻ひとつひとつが手作業で彫られたものであるという点から当時の人々の並々ならぬ思いを実感した。先人の残した業績に触れて、人が何かを為そうとする時に発揮することが出来る力の大きさを思い知らされた思いだった。

また人工的に作られたものだけでなく、そこで共に存在している自然にも大きな衝撃を受けた。巨大な木々が所狭しと生い茂っていて、自然の雄大さをひしひしと感じた。特にスポングと呼ばれる、遺跡の一部を飲み込むようにしながらもその身を天高くそそり立たせている大きな樹木の姿には大変驚かされた(写真2)。

今回の実習では複数の大学と多くの学生が参加していたが、日程のずれなどもあり多くの



写真1. アンコールワット遺跡

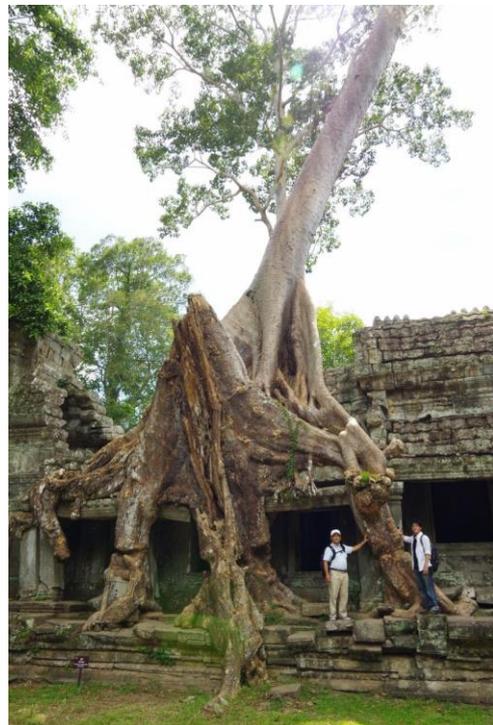


写真2. スポングの木

時間をともに過ごすことはできなかった。それでも食事の時間や遺跡見学の時、魚のサンプリングといった活動では、わずかながら時間を共にすることが出来た。そういった時間で触れ合った学生のほとんどがとてもよい表情で実習に参加していて、一緒に活動していてとても楽しい時間を過ごすことができた。遺跡での見学では彫刻された壁画の絵に興味深げに見ていて、魚のサンプリングでは水から揚げられたば



写真3. 魚を集めるインターンシップ学生たち

かりで飛び跳ねている魚を、おっかなびっくりながらも積極的に集めていた（写真3）。そんな姿から、すべての活動に楽しみながらも一生懸命に参加しているということがはっきりと伝わってきた。

現地の人へのインタビューでは様々な話を聞くことができ、それこそ価値観を大きく変えられるような話も中にはあった。特に子どもがいる家庭から聞いた話で学校が十分に機能していないという話しは耳を疑った。カンボジアでは、近くに学校がないため何kmも歩いて学校に通わなくてはならなかったり、学ぶ教科が日本で言う国語しかなかったりなど多くの問題が存在していた。中でも驚いたのは、学校の教師がその仕事を専門としておらず副業としていること多いということだ。日本では教員が副業を行うことすら禁止されているのにカンボジアでは教員を副業としているという差に大変驚かされた。そのような背景もあり市街地から遠く離れたところにある村に作られた学校には教師が不定期にしかやってこないため、学校が毎日開かれることすらないというような状況であった。

私たちは当たり前のように学校に毎日通っていたが世界から見るとそれはとても恵まれたものであるのだと、子どもの頃から言われ続けてきたが今回現地の人話を聞いて本当の意味で我々が恵まれているのだと実感することが出来た。

今回の実習を通して様々な人と関わり、触れ合い、多くのことを学ぶことが出来た。今回のような経験を得ることができたのは今後の人生で大きくプラスになると思う。このような機会を設けていただいた関係者の皆様、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

## 7. 鹿児島大学の海外フィールド実習報告



## 1) 鹿児島大学の海外フィールド調査実習

鹿児島大学総合研究博物館・教授 本村浩之

金沢大学の海外インターンシップに合流し、鹿児島大学の海外フィールド調査実習を実施した。今回は鹿児島大学大学院連合農学研究科と同大法文学部の学生2名(写真1)が同行し、アンコール遺跡公園内の魚類相を調査した。

参加学生の2名はふだん海水魚の研究をしているため、淡水魚に関する知識はほとんどない。そこで、今回、淡水魚の調査の仕方や標本作成方法を学ぶための実習として、アンコール遺跡公園内のスラスラン沐浴場遺構(写真2)、アンコールワット環濠(写真3)、西バライ、および北バライ(写真4)における魚類の調査実習を行った。スラスランとアンコールワット環濠の魚類調査は継続的に行われており、西バライと北バライは初めての調査であった。今回は特にスラスランの魚類相の驚くべき変貌を目の当たりにした。スラスランは調査の数週間前には干上がってしまったようであるが、調査日にはすでに水が満たされていた。しかし、採集された魚は、低酸素の止水でも生息可能な *Esomus* 属とキノボリウオのみであり、以前の調査時にみられたような高い多様性は失われていた。今後、どのように魚類相が変化していくか調査を継続していきたい。

西バライの調査実習は、金沢大学のインターンシップと合同で開催された。まず、筆者がカンボジアおよびトンレサップ湖の魚類についての概要をインターンシップ参加者に説明し(写真5)、その後、曳網や投網での魚類採集調査を見学しながら、得られた魚を収集する手伝いをした(写真6)。およそ500匹の魚を集め、それらを種ごとにソーティン



写真1. 参加学生 in タプローム寺院



写真2. スラスランでの魚類調査



写真3. アンコールワット環濠の調査

グする作業を行った。魚を触ることができない学生がいる一方で、炎天下のなか、永遠と魚とりをしている活気ある学生もいた。インターンシップの学生は、熱帯魚店や水族館でしか見られないような綺麗な魚や変わった形をした魚に実際に触れて、とても良い経験をしたようである。来年度もぜひ合同で実施したい。

調査実習の他に、ホームガーデンや孤児院訪問もインターンシップの学生と同行し、交流を深めることができた。インターンシップ活動も調査実習もトラブルなくスムーズに進み、終わることができた。これは金沢大学の塚脇さんによる入念な事前準備と公団の職員との密な連携のたまものである。今回の調査実習では、他にも埼玉大学の荒木さんや小松短期大学の木村さんにもお世話になった。ありがとうございました。



写真 4. 北バライの調査



写真 5. カンボジアの淡水魚の説明（西バライ）



写真 6. とれた魚を集める学生たち（西バライ）

## 2) カンボジア, シェムリアップでの淡水魚類相調査

鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程 1年 福井美乃

2016年8月29日から9月3日までのおよそ1週間、金沢大学の主催するインターンシップに合流し、アンコールワットの環豪に生息する淡水魚類の調査に参加した。私の専門は魚類の分類であるが、扱うのは専ら海産魚類である。市民向けの河川観察会で淡水魚類の調査を行ったことはあったが、今回のような本格的な調査は初めてだ。しかしながら、指導教員である本村教授から「いつも通りの標本作成をすればよい」と言われたのも手伝って、この貴重な機会を逃す手はないと勇んで参加を決定した。

魚類相調査チームは、到着翌日の8月30日から、スラスラン、アンコールワット、西バライ、北バライの順に調査を行った。衛生上の問題もあり、自ら環豪に入って採集することは殆どできないため、現地で漁業を営む夫婦に採集を依頼した。彼らはテニスコートに張られるネットのような長さ3m、幅1m30cmほどの網を用いて採集を行った。それぞれが水面に対して垂直になるよう網の端を広げて持ち入



写真1. アンコールワットでの魚類採集の様子

水後、片方は小回り、もう片方は大回りをして、岸に対しておおよそ半円を描くようにゆっくりと歩く。歩きながら網を傾けていき、驚いて動き出した魚が網に絡み取られていく(写真1)。岸に上げられた網から、魚を1匹ずつ傷つけないように引きはがして標本瓶に入れるのは調査チームの仕事だ。1定点につき5、6回網を曳いた。1網にとれる魚はそれほど多くないが、網を曳き終えるころにはひと抱えもあるタッパーにぎっしりと魚が詰まった。

魚類相調査とは、目的とする場所の魚を捕まえて、同定(捕まえた魚の種名を調べること)し、その場に生息する魚の種組成を明らかにすることである。また、採集した魚類は、各鱗を広げて固定し、生鮮時の色彩をデジタルカメラで撮影、防腐処理を行ったのち学術標本として登録・保管する。採集から登録までを1サイクルとして、期間中毎日これを繰り返す。海水魚と淡水魚では鱗を広げる際につかう力の加減や、固定の時間が異なり、慣れるまでに時間がかかった。また、普段絶対に見ることのない魚ばかりで種の同定が難しく、特にコイの仲間は各種の違いを把握するのに一苦労だった。採集できた魚の数にもよるが、朝、現地に到着して採集を始めると、作業が終了する頃には夕方になっている。体力勝負の部分も大きいですが、毎日調査を行うことによって徐々に明らかになる魚類相を見るのは最高の楽しみだった。

これまでに行われた調査と今回の調査の結果から、いくつかの定点で魚類相が変化した

ことが明らかになった。例えばスラスランの魚類相は、以前と異なり、キノボリウオをはじめとする貧酸素でも生き残れる種の優先度が高くなった。これらは2009年に発生した記録的大洪水や、2016年8月に発生した干ばつに起因するものであるようだ。短期間で魚類相が大きく変化していることに驚いた。淡水魚は環境変化の影響を受けやすく、そのため定期的な調査が必要であると実感した。

世界遺産であるアンコールワットの環豪での魚類相調査は、カンボジア政府からの許可を得た調査チームのみが許される。そして現在、その許可を得ているのは我々日本の研究チームのみであるため、今回の調査結果は過去のデータと併せて世界遺産内の生物相の貴重なデータとして利用されるだろう。このような重要な調査で得られた経験は、これからの自分の研究をより豊かなものにしてくれると思う。この場を借りて、今回参加を受け入れてくださった各研究機関の先生方、職員の皆様に心からの感謝を伝えたい。

また、調査期間中にインターンシップに参加する学生と交流する機会をいただくことができた。みな、新しいことを学ぶのに積極的で、矢継ぎ早に質問を繰り返す姿が印象的だった。私たちの調査に合流したときは、調査チームに負けず劣らずの手つきで網から魚を外し、ソーティング（魚を種ごとに分ける作業）まで熱心に行ってくれた。はじめは恐る恐る作業していた学生が、次第に見たことのない魚を求めて移動



写真2. とれた魚を種ごとに分ける（西パライ）

しながら、顔を輝かせて魚を握るようになる様子を見ていて面白く、また、フィールドワークの原点を見たような気になった（写真2）。2週間の滞在中には、きっと楽しいことばかりではなく心身ともにきついこともあっただろうが、夕食時に聞かせてもらったアプサラ公団での仕事の話の中では、彼らの発見・勉強したこと、考えたことが生き生きと語られ、トラブルを乗り越えながら充実した毎日過ごしている様子を伺い知ることができた。

同行した植物調査チームの話もたいへん興味深かった。普段全くかかわりのない分野のサンプリングや研究方法は、想像力を掻き立てられ、また、まだ見ぬサンプルを追い求める姿に、自身の研究に対するモチベーションが高められた。

今回のカンボジア出張以降、「新たな経験と発見をすることは、少なからず人を成長させる」のではないかと考えるようになった。当たり前のようだが、日常を離れた経験には失敗やトラブルがつきものだ。それに臆せず、何事も前向きに取り組んでいけば、得るものは大きい。今後またどこかで、今回の調査中に出会った人々と再会したとき、私自身さらに成長した姿でいられるよう、今以上に積極的に研究に取り組みたいと思う。

### 3) カンボジアにおける淡水魚類相調査と得られたもの

鹿児島大学法文学部人文学科 2 年 立川日奈子

2016 年 8 月 29 日から 9 月 3 日の 6 日間、私はカンボジアのシェムリアップにおける淡水魚類相の調査に参加させていただいた。本村先生に今回の調査のお話をいただいた際、普段からボランティアで魚類の標本作成をしているとはいえ経験も浅く、魚類の研究とは全く分野の異なる法文学部に所属している自分に調査が出来るのかという不安がとても大きかった。しかしカンボジアというこれまで全く縁のなかった海外の国に行くことが出来ることに加え、法文学部に所属する私にとって魚類相の調査が、それもアンコールワットなどの世界遺産の中で出来るということはまたとない機会だと思い、この調査への参加を決意した。

調査初日は宿泊していたホテルの近くの市場で魚を調達した。私はこれまで海外の、それも現地の人々が日々活用しているような市場を訪れるという経験がなかったため、山積みされた淡水魚（まだ生きており通路に飛び出てくるものもいた）やカエル、皮をはがれたニワトリなどに目が釘付けになり、市場の雰囲気やそこにいる人々の活気に圧倒されてしまった。そのため本村先生や同じ調査チームの先輩である福井さんが魚を選び購入しているのについていくことがやっとだった。そして購入した魚で標本を作製する段階になってよく見てみると、普段標本にしている海水魚とは違う特徴が多く、何よりもこれまで抱いていた淡水魚は地味な色をしているという印象とは異なり、鮮やかな色彩をしているということに驚いた。先生がおっしゃったとおり淡水魚はたてた鱗が短時間で固まったが、その魚が何という種類であるかを特定する作業が最も難しかった。ただでさえ淡水魚に多いコイ科などに明るくない上、和名のないものも多く、ひたすら図鑑の絵と見比べて標本にした魚と同じ特徴を持つものを探した。

翌日からはスラスラン、アンコールワットの環濠、西バライ、北バライの順に調査を行った。その際、現地の漁師の方々に網で魚を取っていただき、私たちの調査チームはその網にかかった魚を取外し容器に移す作業をした。漁師の方が肩の高さまで水に潜り、大きな網の両側をそれぞれ一人ずつもってそのまま水中を歩き、涼しい顔で網を引いているのを、私は岸で魚を入れる容器を抱え、蟻に足をかまれながら必死で追いかけた。スラスランや北バライで調査をしている際には現地の子どもたちが興味を示し、魚を網から外す作業を手伝ってくれたことが非常に印象深かった。（写真 1）このよ



写真 1. スラスランで子供たちが魚を見にくる

うに現地の人々と言葉は通じないながらも魚をとることを通して、それらの魚の現地での呼び名や、網から上手に外すコツなどを教えてもらい、とても濃い時間を過ごすことが出来た。

また淡水魚は海水魚に比べて種数が少なく、生息環境の変化を受けやすいため魚類相も短期間で変化するということが、過去の調査についてのお話を先生に伺い、そして様々な場所とれる魚を自分自身の目で確かめたことによって実感できた。私はこれまで調査と呼べるような調査を経験したことがなかったため、単なる旅行とは異なる、「調査」というものがどういったものかということに少しは近づくことが出来たような気がする。また滞在中には先に述べたような漁師の方や地元の子どもたちに加え、運転手さんやいろいろなお店の店員さんなど現地の人々に関わる機会がたくさんあったが、どの人もみなとても気さくに接してくれることがとても印象に残った。彼らのちょっとした優しさを感じる場面は数え切れないほどあり、自然と相手の心を近くに感じることが出来てとても心地よかった。特に調査中毎日お世話になった漁師の方々（写真2）や運転手さんとは調査が終われば会うことが出来なくなると思うと寂しくなった。言葉が通じなくともここまで人と人とは近づくことが出来るということに気づき、とても驚いた。そしてまた必ずこのカンボジアのシェムリアップに戻ってきたいと強く思った。



写真2. 現地の漁師の方々と

また今回の調査において現地の方々のみならず、金沢大学のインターンシップに参加されている学生の方々とも交流させていただくことができたことは私にとってこの上なく良い経験になった。金沢大学の方々是我たちの調査チームよりも早くからカンボジアに滞在されていたため、現地での生活についてのアドバイスをさせていただくことがとてもありがたかった。そして何よりも、彼らがどんなことにも興味を持ち積極的に英語を使って現地の人ともコミュニケーションを図る姿や、普段は縁がないであろう魚類相の調査にも進んで参加する姿は、何に対しても失敗を恐れて少し奥手になってしまう私には非常に良い刺激になった。外国に行くということは、自分とは異なる文化やそこに住む人々との関わりから学ぶことが多いように思うが、今回自分と同じ立場である日本の学生の方々と交流出来たことはかえって印象深く、私も彼らに負けないよう自分から進んで未知の世界に飛び込み様々な経験をしていきたいと思わせてくれた。

また埼玉大学の植物調査チームの方々とも交流させていただく機会が何度もあり、今回の調査では淡水魚類相に加え、遺跡内やトンレサップ湖などの植物について、また世界遺産である数々の遺跡、現地の人々の生活といった文化的なことについてなど様々な角度からカンボジアという国について知ることが出来た。

このように言葉では言い表せないほど充実した日々を過ごさせてくださり、またとない貴重な経験をさせてくださった各大学の先生方やそしてアプサラ公団の職員の方などの現地の方々にはどんなに感謝をしてもしきれない。これらの方々に加えて引っ込み思案な私にとっても良い刺激をくれた学生の皆さんにもこの場を借りて感謝の意を表したいと思う。また私がいつも克服できずにいる癖として「のど元過ぎれば熱さを忘れる」といったように何かに感銘を受けてもその時の想いを心の中に長く灯し続けていられないということが挙げられるが、今回の調査で出来た経験や、受けた感動、刺激は私の中で色褪せることなくずっと残りうる物ばかりであったと思う。だからこそ時に今回の調査を振り返りながらも、これからは自分の殻を打ち破ることに努めるとともに、自分自身でテーマを掲げた研究が出来るよう日々邁進していきたい。

## 8. 特別寄稿：小松短期大学とアプサラ公団との繋がり

小松短期大学・学長 長野 勇

金沢大学のアンコール遺跡整備公団インターンシッププログラムに、昨年に引き続き小松短期大学から 2 名の学生を受け入れて頂きました。昨年度は本学として初めての学生派遣であり、その詳細については「2015 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書」に本学の木村誠准教授より詳しく報告させて頂きました。まずは、本プログラムを創設され、アプサラ公団とのすべての調整にご尽力頂き、小松短大の学生を受け入れて頂いた金沢大学塚脇真二教授、そして金沢大学として本プログラムを推進して頂いている人間社会学域国際学類長加藤和夫教授に感謝申し上げます。

小松短大がこのプログラムに参加させて頂いた経緯について少しご説明させて頂きます。2010 年 2 月にアプサラ公団と金沢大学とのインターシップ協定を結ぶ際に、当時の金沢大学学長中村信一氏を代表として、私は研究・国際担当理事の立場で、塚脇真二教授とアプサラ公団を訪問しました。当時の公団本部は現在のような立派な独立した建屋でなく、アンコール遺跡の中にあり、遺跡の資料整理や、それを利用した研究を推進する建屋の中にあつたと記憶しております。その時の調印式の様子を写真 1 に示します。



写真 1. 2010 年 2 月の調印式の様子（左：Bun Narith 前総裁，右：中村前学長，その後ろ：長野）

この調印の後より、塚脇先生の献身的なご努力によりインターンシッププログラムが始まりました。私は、金沢大学退職後、小松短大に移りました。短大生の多くは卒業後小松市周辺の企業に就職をするのですが、私は国際的な視野をも兼ね備えた人材を小松短大にて育成することを目指しました。小松市には、世界との橋渡しに都合の良い小松空港があります。これを中心にして小松短大のグローバル化を展開することに心がけました。小松短大には航空・観光ホスピタリティステージ（学科に相当）があり、そこでは CA（キャビンアテンダント）や空港での地上勤務要員や観光産業人を養成しております。

小松短大は平成 26 年 9 月に小松市の姉妹都市である台湾の彰化市に位置する建国科技大学と大学間協定を締結しました。この大学には応用外国語学科があり、両大学間での学生交流プログラムにおいて、今年度は半年間、建国科技大学から留学生の受け入れを開始しました。更に複数の大学との協定を目指して、塚脇先生にご紹介を頂き、平成 27 年 3 月にはホスピタリティ観光学部を有する、タイのプリンスオブソンクラ大学 (PSU) とも大学間交流の覚書(MoU)を交わしました。今年度はプーケット校の学生 3 名を 2 週間小松短大に受け

入れております。この間に、冒頭に述べましたように塚脇先生の主催されるアプサラ公団と金沢大学とのインターンシッププログラムに参加させて頂きました。

私は今回、今年度の小松短大からの2名の参加学生（田中嶺那さん、森瀬陽人君）と引率教員（木村誠先生）の活動の視察を兼ねてアプサラ公団に2度目の訪問をしました。写真2には公団副部門長らによるインタビュー（最終試験）風景を示します。公団職員の英語による質問に本学の学生が答える姿をみて感動しました。金沢大学の学生並びにチューターの支援があつてこそ、この試練を終えることが出来たと思います。この場を借りてお礼を申し上げます。この貴重な経験は将来必ず生きてくるものと思います。



写真2. 森瀬君のインタビュー風景

今回の訪問の主目的は、9月2日（金）に行われた小松短期大学とアプサラ公団における「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書への調印式に参加することでした。「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」は、小松短大が実施している観光地でのバリアフ



写真3. 調印式の様子

リー観光調査などの環境調査・環境保護に関わる技術やアイデアをアプサラ公団に提供し、小松短期大学の教職員、学生がともに世界遺産を有する観光地でともに学び、能力開発を目指すプログラムです。写真3はアプサラ公団総裁の Dr. Sum Map 氏と調印を交わした時の様子です。

式典当日は今年のインターンシップ最終日と同日に行われたため、インターンシップの参加者（金沢大学、鹿児島大学、埼玉大学、小松短大）全員と公団関係者で夕食会を開催させて頂きました。写真4にはインターンシップ終了と小松短大と公団の調印式を祝しての夕食会の集合写真を示します。



写真4. 夕食会での集合写真

塚脇先生のアプサラ公団での学術調査の実績によって実現したこのインターンシッププログラムが、多くの日本の大学からの参加により大きく発展したことに敬

意を表します。正に国際人養成のための真のプログラムです。本インターンシップにおいて世界に羽ばたく人材が育成されることは間違いありません。

最後に、これまで小松短大のグローバル化に大変ご尽力を頂いている塚脇先生はじめとしてアプサラ公団総裁 **Dr. Sum Map** 氏， とりわけ副総裁 **Dr. Hang Peou** 氏には多大なご支援， ご協力を頂きました。ここに改めて関係者全員に感謝の意を表します。また， 金沢大学のインターシッププログラムが今後益々ご発展することを祈念しております。有難うございました。

## 9. 資料

### 2016年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

#### 1. 参加者

##### (1) インターンシップ学生（金沢大学・小松短期大学）

- 大関 美結（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース2年，グループ1）
- 今井 菜緒（金沢大学人間社会学域人文学類 フィールド文化学コース2年，グループ1）
- 瀨崎 佳奈（金沢大学人間社会学域国際学類 ヨーロッパコース2年，グループ2）
- 須田 瑞帆（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース2年，グループ2）
- 伊藤 果穂（金沢大学人間社会学域国際学類 日本・日本語教育コース2年，グループ3）
- 若林 唯（金沢大学人間社会学域国際学類 アジアコース3年，グループ3）
- 田中 嶺那（小松短期大学地域創造学科 臨床工学ステージ1年，グループ3）
- 三輪 聡子（金沢大学人間社会学域国際学類 米英コース2年，グループ4）
- 近藤 友理奈（金沢大学人間社会学域人文学類 フィールド文化学コース3年，グループ4）
- 森瀬 陽人（小松短期大学地域創造学科 臨床工学ステージ1年，グループ4）

##### (2) チューター

- 河本 麻実（金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻1年）
- 若宮 野乃花（金沢大学人間社会学域国際学類 日本・日本語教育コース3年）

##### (3) 連絡教員

- 塚脇 真二（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授，8月19日～9月7日）
- 木村 誠（小松短期大学地域創造学科・准教授，8月21日～9月5日）

##### (4) 埼玉大学

- 荒木 祐二（教育学部 技術教育講座・准教授，8月30日～9月6日）
- 浅子 孝一（教育学部 技術教育講座・技術職員，8月30日～9月6日）
- 岩崎 翼（教育学部 学校教育教員養成課程3年，8月30日～9月6日）

##### (5) 鹿児島大学

- 本村 浩之（総合研究博物館・教授・館長，8月28日～9月5日）
- 福井 美乃（大学院連合農学研究科農水圏資源環境科学専攻1年，8月28日～9月5日）
- 立川 日奈子（法文学部人文学科2年，8月28日～9月5日）

##### (6) 小松短期大学

- 長野 勇（学長，9月1日～9月4日）
- 西田 友紀（庶務課主事，9月1日～9月4日）

#### 2. カンボジア側受入機関・責任者

カンボジア国立アンコール遺跡整備公団（Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Cambodia） / Hang Peou 副総裁兼水管理部門長

### 3. 各グループの担当業務

グループ1：アンコール世界遺産の地域住民支援事業（クメール・ハビタット）

グループ2：ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業

グループ3：西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

グループ4：北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

### 4. 全体日程（2016～2017年）

- 2月29日（月）：第1回実施委員会（実施概要の確認）
- 3月29日（火）：アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
- 4月7日（木）：インターンシップ説明会（金沢大学人間社会学域国際学類生対象）
- 4月13日（水）：インターンシップ説明会（金沢大学全学生対象）
- 4月13日（水）：インターンシップ参加者の募集開始（金沢大学）
- 4月26日（火）：インターンシップ説明会と参加者の募集開始（小松短期大学）
- 5月25日（水）：インターンシップ参加申し込み〆切（金沢大学）
- 5月25日（水）：第2回実施委員会（金沢大学：参加学生の選考会）
- 5月25日（水）：選考結果を応募学生へ通知（金沢大学）
- 6月1日（水）：アンコール遺跡整備公団と打合せ（シェムリアプ）
- 6月7日（火）：インターンシップ参加申し込み〆切と選考結果の通知（小松短期大学）
- 6月8日（水）：第1回インターンシップ事前説明会（金沢大学/小松短期大学）
- 7月5日（火）：第2回インターンシップ事前説明会（金沢大学/小松短期大学）
- 7月6日（水）：第3回実施委員会（実施概要の再確認）
- 7月15日（金）：第1回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 7月22日（金）：第2回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 7月26日（火）：第3回インターンシップ事前説明会（金沢大学/小松短期大学）
- 7月29日（金）：第3回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 8月5日（金）：第4回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 8月9日（火）：第5回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 8月19日（金）：第6回インターンシップ事前研修（小松短期大学）
- 8月20日（土）：アンコール遺跡整備公団との最終打合せ（シェムリアプ）
- 8月21日（日）～9月4日（日）：インターンシップ実施期間（※委細は別記）
- 10月14日（金）：インターンシップ報告会（金沢大学）
- 10月18日（火）：インターンシップ報告会（小松短期大学）
- 11月11日（金）：インターンシップ報告会（金沢大学人間社会学域国際学類生対象）
- 11月18日（金）：インターンシップ事後指導（金沢大学/小松短期大学）
- 1月17日（火）：インターンシップ報告書の出版

## 5. 渡航日程と現地での活動 (2016年)

- 8月21日(日): 金沢ー空港バスなど→小松空港(10:45)ーKE776便→(12:40)仁川空港(19:00)ーKE687便→(22:25)シェムリアプ
- 8月22日(月): アンコール遺跡世界遺産公園の見学, 滞在準備など(午前), インターンシップ始業式・グループごとに業務担当者との打合せ(午後)
- 8月23日(火)～8月26日(金): インターンシップの業務に従事
- 8月27日(土): トンレサップ湖見学(午前), 自由行動(午後)
- 8月28日(日): アンコール世界遺産見学(午前), 自由行動(午後) ※鹿児島大学グループ到着(夜)
- 8月29日(月)～9月1日(木): インターンシップの業務に従事
- 8月30日(水): 埼玉大学グループ到着(夜)
- 9月1日(木): 小松短期大学学長一行到着(夜)
- 9月2日(金): 口頭試問(午前), アプサラ公団と小松短期大学の覚書締結調印式に出席(午後), 公団職員らとの夕食会
- 9月3日(土): 自由行動, シェムリアプ(23:25)ーKE688便(機内泊)→(9月4日6:35)仁川空港(8:00)ーKE775便→(9:45)小松空港ー空港バスなど→金沢

※KE: 大韓航空

※小松短期大学の学生は往路・復路ともに小松空港で解散



## 2016 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2016 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

加藤和夫（金沢大学人間社会学域国際学類 教授・学類長）

木村 誠（小松短期大学地域創造学科 准教授）

小原文衛（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）

古泉達矢（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）

辻谷友紀（金沢大学学生部学務課教務係 主任）

塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター 教授）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
-----	--

印刷 発行 印刷所	2017 年 1 月 16 日 2017 年 1 月 16 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223
-----------------	---

